

綺麗な言峰とか呼ばれ始めた奴

温めない麻婆

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ただし悪だくみはちゃんとしてるのにそれがうまく繋がらず勘違いされまくりなポンコツな言峰依り代ラスプーチン（憑依主）となっただけの属性過多な子である。

【ちなみに第五次勢来たら勘違いが加速する】
追記

番外編は別作品として取り扱うことに決めました。なのでチラシの裏にて投稿しております。よければどうぞ。

綺麗な言峰とか呼ばれ始めた奴、番外編

「<https://syosetu.org/novel/2950>

88／」

目次

プロローグ	1
第一話 夜中に蜂蜜ミルクを添えて	4
第二話 カルデアのサーヴァント	9
第三話 危うく見えるのはどちらか	15
第四話 私のサーヴァントにする	21
第五話 求めていたアーチャーじゃない	27
第六話 彼はライナスの毛布である	31
第七話 使い勝手のいい道具	37
第八話 出会ったのが不運	40
第九話 暗躍と日常	44
第十話 一方その頃カルデアでは	48
第十一話 ギャグで終わるのはこの話だけ	51
第十二話 沈み歪み、そうして彼は	55
第十三話 カルデアの刺客	59
第十四話 事の発端	62
第十五話 麻婆教	66
第十六話 その店主、コトミネ	71
第十七話 ギルガメッシュは上機嫌である	75
第十八話 それは藤丸に必要な壁	79
第十九話 ルチャマーボの入り口	82
第二十話 ギャグはこれで終わらせたい	85
第二十一話 気づいたら悪役にされてた	88
第二十二話 元凶を押し付けよう	92
第二十三話 タイミングが悪かった	96

第二十四話	根本を抹消せよ	99
第二十五話	言峰は麻婆聖杯を抹消した	102
第二十六話	底が見えない男	106
第二十七話	ティアマト戦まであと三日	110
第二十八話	もう戻れないので	113

プロローグ

気が付いたらよくわからない場所にいた。

「やあ、君がラスプーチンかい？」

「……ああ」

召喚後混乱しているが、必死にそれを表に出さないように苦勞した。

なんせ今の俺はラスプーチンなのだから。

頭に直接叩きこまれたのは様々な記憶———というか、記録か。愉快神父とかいうあの言峰のとっても楽しそうな嘲笑うような声と共に「後は任せたぞ」とか言って全部ぶん投げやがったのはどういうことか。あとでぶん殴ってやろうか。いや、あいつぶん殴っても自分が苦惱しているろ迷った末の愚かな行動とかいろいろ愉快しそうなんだよなあ。

まあ、つまりだ。

俺は何らかの原因で死んで生まれ変わった……いや、生まれ変わったと言えるのか？

とにかく、俺はかの有名なゲームたるFateな世界に転生したらしい。

そして『ラスプーチン』とかいうやべえサーヴァントになったようである。そう、FGOという聖杯探索をしている人理保障機関カルデアが中心のストーリー。第一部第二部と物語が続いていくその中で、ラスプーチンは第二部の敵側に登場するサーヴァントであった。

何故かは知らないが、そのカルデアに第一部のストーリーがまだ始まってない状態で召喚され協力する形となったのだ。

第一部が始まったわけじゃないが、藤丸立香なる主人公らしき姿を見つけたので、おそらくそろそろ始まる頃だろう。

第一部が始まったたらきつと言峰の姿を知るサーヴァントが召喚されるかもしれない。

特に第五次とか。

まあでもあれだ、警戒されるのはちよつと嫌だが——俺の性格つて言峰神父みたいなやべえ感じじゃないんだが。どちらかというと苦労人。ワカメにも似たあの慎二君よりはちよつとだけ一般人というか、お人好し成分はあるはず。

まあ自分で言うのもなんだが、そんな綺麗な言峰（ ）とかいう状態な俺はこれからどう動けばいいのか迷ってしまった。

心の奥底に必死に押さえつけている言峰本来の愉悦成分を存分に使って楽しむか？ まあバッドエンド間違いなしになってしまうが。それが普通にダヴィンチちゃんみたいに協力者として登場し、どっかで退場するか？

うーんどうせなら面白おかしく退場したいものだ。

ラスボスひっかきまわしてもみたい。……っていう心がこの依り代たる言峰本来の感情であつて、魂は俺、性能はラスプーチンの感じで三つ巴の感情で揺れてるんだよなあ。なんだこれ、俺の心内戦状態か？

戦闘は——なんとか可能。身体能力が凄まじいのもあるせいとか、自然と戦うためにどうすればいいのか理解できている。しかしダヴィンチちゃんのように裏から支えるというのは俺の性に合わない。あと主人公のために尽くすというのもなんか違う気がする。うーん。とか言ってる間にレフなんちゃらが俺に「裏切らないか？」とか言ってきた件について。

この言葉にピーンと思ひ浮かんだのはとある悪だくみ。

これはあれか？

裏切ると思わせてからの裏切つて敵の敵は味方みたいな感じで二重スパイするべきか？

主人公を曇らせて味方だったはずのあいつが敵だと思ったら実は味方で必死に尽くしてたんだよつて言われて泣かせて発狂案件にさせてやるべき計画でも立てろとおっしやる？

それで奇跡的に生き残ったなら次に来るであろう本物のラスプーチンに面白おかしい愉悦を提供できるだろうし……ああ、なんかだんだん言峰か何かの影響を受けてやがるな。本来の俺はこんな感情持ってなかったはずなのに。

(とりあえず第二部直前までは死なずに頑張るか……)

第一話 夜中に蜂蜜ミルクを添えて

人類史が消失。マスターも藤丸立香を残して全員がほぼ瀕死状態。流されるように特異点Fの攻略を進めてきた藤丸立香は、深夜ともいえる時間帯に目が覚めた。

あれだけ大騒ぎしていたカルデアだったというのに、夜中は別世界かと思えるような静寂さが襲いかかる。

これから先何が起きるのか不安があった。

藤丸立香にとっては一般的な魔術師にも劣る奇跡的に見つかった一般人。自分の代わりがいるのなら、きつとすぐ交代してしまうような頼りない存在。それでも自分が必要なんだと言ってくれた後輩がいるからと、藤丸立香は前へ進む決意をした。

悲しい決別も、敵への怒りも。

これから先の戦いで自分は勝てるのかという不安すら押し込めてやるべきことをやる。第一特異点となった時代でも藤丸立香は協力してくれたサーヴァントたちと共に戦った。その後縁が出来たのかカルデアへ召喚されてくれた彼ら、彼女らに感謝しつつ、生き残るために足掻いている最中だった。

そう、藤丸立香はつい数日前まで戦っていた出来事を思い出しながら歩く。パジャマではなく、有事の際すぐ動けるよう運動服を着ているが、少しだけ肌寒い。

廊下の電灯は節電モードにしているのか一部薄暗かった。

眠くもない。

お腹もすいていない。

少しだけ薄暗く寒い廊下を何の目的もなく突き進む。

次は第二特異点。

それが終わったら次は――。

「おや、人類最後のマスターがこんな場所までやってくるとは……」

「えっ?」

聞こえてきた声に藤丸立香は顔を上げる。

そこにいたのは神父服を身にまとった男だった。長身かつ服の上からでも鍛え上げられていると分かる身体をしている。

一般人ではない。

でもカルデアに生活していて誰も何も言わないということは、彼は関係者だろう。

「あなたは……」

「ラスプーチン——いや、言峰綺礼と呼んでくれたまえ」

「言峰……さん?」

ラスプーチンとは、確か過去の有名な人の名前ではなかっただろうか。

つまり英霊、サーヴァントということだろうか。

藤丸立香はダヴィンチちゃん顔を思い浮かべながらも、彼がカルデアに召喚され協力してくれている協力者だと理解した。

「何故ここに来た。藤丸立香。君は忙しい身であろう。このような時間にカルデア内を徘徊するような行動を取っていい身ではないはずだが?」

「うっ……それは、そうなんです……」

顔を引き攣らせつつ、うまい言い訳が思い付かず、藤丸立香は顔を背けた。

なんせ自分以外は成すことの出来ない人類最後のマスターとしての自覚はまだなかったから。たぶんもつと特異点を攻略していつて、いろんなことを経験していけば理解できるとは思うけれど藤丸はそう思う。しかし思うだけであって、言うつもりはない。

説教されるのも嫌だと、なんとなく思ったから。

これが怒られるような行動だというのは分かっている。
肌寒い夜だった。

薄着で廊下を歩いていくという行為は風邪をひくかもしれない。
ロマンやマッシュがここに居たとしたらきつと悲しませてしまうな
……と、藤丸は理解していたから。

「…………ふむ」

何かを思い至ったのか、言峰が藤丸に「ついてきなさい」とどこかへ歩いていく。少し先を歩いてもついてこない藤丸に振り返り、待っている様子だったので藤丸も慌てて追いかけた。

「あ、の……」

彼は何も言わない。

藤丸が無言でついてくるのを確認する以外は後ろを振り向いて話しかけようともしない。

微笑んでくれたけれど、それが自分を案じてくれているのかすら分からない。

死んでいるかのような目は、敵意か否か。それは自分を害する者じゃないのか。藤丸には言峰という存在が分からない。

言峰さんは、自分のサーヴァントじゃないけれど、カルデアに協力してくれている人なんだろうかと——少しだけ不安になった時だった。

「飲むといい」

「えっ」

考え事をし過ぎていたのか、気が付いたらキッチンの中にいた。

そこで出されたのはホットミルク。怪しむ間もなく一口飲むと蜂蜜のような甘さが喉を通っていく。

息をついて言峰を見た。

彼はこちらを見下ろしながら真顔で言う。

「泣きたい時は、泣きなさい」

それは冷めているようで温かな言葉。

「背負わなくてはならない業というのは、不意に己の身に降り注ぐことがある。まるで英雄が神託を受け取った時のように。……だが藤丸立香、君は一般人だ。人類最後のマスターなんぞという業を背負うには少しばかり重苦しいものがあるだろう」

その声は、慰めを含めたものじゃない。

ごく普通に、真つ当に。己自身を評価するもの。

「よく頑張ったな、藤丸立香」

その衝撃は、きつと計り知れないものだっただろう。

人類が崩壊したと言われた時に似たもの。何処かに落とされたように、藤丸立香は自覚したのだ。

自分は頑張ったのだと。

頑張らなくてはならない。我慢しなくてはならないのではなく、頑張ったのだと。

「うっ……ぐすっ……」

蜂蜜のような香りが辺りに漂う。

一口飲んだのに、それは少しだけしょっぱかった。塩辛かった。

藤丸立香は、己が泣いていることを受け入れた。

それを言峰はじっと見つめているだけ。何も言わず、慰めることもなくただ静かに寄り添う。

それだけでよかった。

ただ一言、褒めてくれるだけで。

マシユ達は仲間だ。弱気な顔を見せることはできない。そう藤丸立香は理解している。

でも——ここで初めて会った言峰さんは、なんとなく弱い部分を見せてもいいような気がした。

一目見て看破されたせいだろうか。

それとも、今の藤丸立香にとって最も欲しい言葉をくれた人物だからだろうか。

「こ、とみねさん……」

「なにかね？」

「貴方は一体何ですか？」

「さて、神父として活動……といたいたいところだが、今の私は雑用を任された身。いわゆるカウンセリングなどを担当しているしがないサーヴァントだ」

「カウンセリング……」

「辛かったらいつでも聞こう。それが私のやるべき事だ」

死んだような目の中に驚愕と楽し気な色が混じったように見えた。

そんな言峰がどういう本性をしているのかを知るには、少しばかり遅かったのだ。

真夜中に何度も言峰と会い様々な会話をし泣きながら弱い部分を曝け出す藤丸が、いつか召喚されるであろう第五次のサーヴァントたちに言う時まで続く。

第二話 カルデアのサーヴァント

カルデアの端に位置する場所。

爆発により崩壊した箇所近く。未だにライフラインが出来ていないそこは、カルデアが活動するために必要な魔力などの心臓部から最も離れた場所ではあった。

だが、そこは裏口のような場所であり、誰かがこっそり侵入しても気づかれない程度には監視の目が行き届かない場所。最初に起きた爆破の影響もあつてか、ジャックやナーサリーなどといった幼い姿をしているサーヴァントがかくれんぼ等で遊ぶ際にも滅多に来ることのない場所。寒くて薄暗くて人が住むには適していない元居住空間。そのエリアの修復を軽く済ませつつ、管理しているサーヴァントがいた。

マスターが倒れた際のカルデアにおいての最後の武器のようなもの。カルデア全体を守るためにという理由で召喚されただけ。

どこぞの王様系サーヴァントがそれで召喚されたのだとしたらカルデア全体が酷い目に遭っていただろうが、運がいいのか悪いのか、召喚されたのはラスプーチンこと、言峰だった。

裏口のような場所から敵が来ないよう門番のごとく守ってもらおうということ。

マスターが何かしら危機的な状況の場合。またはマスターたる藤丸立香と契約したサーヴァントが動けなくなった場合にのみ全体的にカルデアを守る役目を背負った。いわば最終兵器。絶体絶命の時に反撃するための一手として藤丸立香ではなく、カルデアそのものと契約状態になったようなもの。

———そう、言峰は自分自身の立ち位置を理解していた。

おそらくは例外的に協力状態のホームズや藤丸立香の生き様を見てみたい観客としてたまに手を貸すマーリンとは違う。

現時点で自分と同じく戦いの前に召喚されカルデアと契約を結んでいるダヴィンチもいつか藤丸立香と本契約を結びあの子をマスターと認める日が来るだろう。

だからある意味、言峰は自由だった。

カルデアに召喚されてはいるが、マスターと共に人理を救済するため戦っているわけではない。ただ門番のようにそこにいるだけ。それは他の者からすればサーヴァントとしてプライドが許さず屈辱であると主張してもいいぐらいのもの。

だが言峰はそれを受け入れた。

ただ門番まがいの事をして暇なだけ。働いているわけではないと言つて、言峰はカウンセリングにも似たことをするようになった。

たまに泣きながら歩いている一般職員を見たらすぐ声をかけ、部屋へ連れていき話を聞く。それだけで救われたのだと勘違いし依存する者がいるのを知っている。

弱音を吐くような状況ではない。周りすらも常に頑張っている人がいるのだから自分も頑張らなければと我慢しまくっていたことを、言峰になれば全て吐き出すことができる。

たまに言峰にしがみついて赤ん坊のように泣き、たまに人類を崩壊させた敵へ向けて怒りを吐き出し。

そうしてスッキリした状態で帰っていく。

カルデア職員全体が——世界救済へ奮闘する藤丸立香に余計なことを言つてもしょうがないと思ひ伝えないでいるが、ラスプーチンこと言峰が藤丸立香ではなくカルデア全体を守るためだけのサーヴァントということを知っている。

だから彼は、ダヴィンチと同じく裏切らないだろうと思われている。

言峰はそう自分自身を客観視していた。

彼の優しさによってカルデア職員は裏口を警戒することなく、またカルデア全体で謀反やらなんやらが起きても絶対に大丈夫だという安心感でもって安眠することが出来ているのだと。

自分の事を知る存在はカルデア職員とダヴィンチ、そしてロマニ・

アーキマンぐらいだろうか。

彼らは全員言峰を信じている。

それを言峰は面白おかしく眺めているだけ。

忙しい生活の中で、言峰は定期的に誰も邪魔されないような時間を
作るようにしていた。

それは秘匿すべきもの。

カルデアを裏切るような行為。

本を読んでいた言峰がしおりを挟み、机にかけられた魔術によつて
かかつてきた通信をとる。

『ラスプーチン。カルデアは今どうなっている』

「なに、いつもの事だよ。あと少しすれば次の特異点へ向けて旅立つ
だろう」

『チツ』

裏切りといっても、言峰がやっているのはレフに向けて定期的にカ
ルデアの状況を説明するだけ。

基本的にレフはサーヴァントを軽視している。信頼もせず、ただの
道具として見なしている。だから彼はカルデアがそろそろどの特異
点へ来るのかを教えるだけにしていた。

なんせカルデアは摩訶不思議な特異点に——つまり、レフが用
意していないはずのよくわからない場所へ巻き込まれることもある
のだから。

いわゆる夏の無人島。サマーバケーション。

魔のハロウィン。

よくわからない日本サーヴァントたちの特異点。

せっかく用意して待っていたのに何故かそんな変な特異点に行つ
ていて自分は待ちぼうけという状況にレフは何度地団駄を踏んでい
たのだろうかと言峰は嗤いそうになった。

一度「藤丸立香はハロウィンを成敗しに行った」という報告にレフ
が『はっ？ 嘘をついていないか。正気か貴様？』とこちらを全く信

じていない言動しかせず、それが本当だと理解できて呆然としていたのは噴き出しそうになったと言峰は思い出し、肩を震わせる。

言峰は自由だ。

だからレフに道具と見なされ、侮辱的な言動をされても全て聞き流した。

なんせそれは、どうでもいいことだったから。

レフが何を言おうとも、最後には殺されてしまう運命しか残っていない相手と向かい合うのは疲れるだけだと。

それにレフは扱いやすかった。

プライドが高く、こちらを軽視する行為。

何時でもカルデアごと殺せるのだぞという慢心があったせいだろうか。

一度言峰がカルデア内部にいるのだからと『カルデアを滅ぼせ！』といってきたこともあったが、その命令には「ほう？ 貴殿には出来ない行為だと認め、この私に協力を求めるといふのだな？」という挑発にキレて、その怒りが藤丸立香へ向けられ特異点で悪役っぷりを見せたが最終的にレフは八つ裂きされたという結果が残った。まあ八つ裂きされたのはほんの一部。すぐ逃げたし屈辱的な結果を言峰に伝えて嘲笑われるというのはレフのプライドでもって許さないだろうと言峰は判断しているが。

つまりだ、レフがカルデアの協力者な言峰自身に対し命令するのならそれは相手を信じ『貴様ならカルデアを滅ぼせるであろう』という言動そのもの。自分ではできなかつたと認めているようなもの。

そこを指摘すればレフは二度と言峰に命令はしない。

ただ藤丸立香がどの特異点に行くのかだけは注視しなくてはならないと理解しているようだった。そう言峰はレフの心境を理解する。

カルデアを倒すためにと用意したものだといったのに、気が付いたら夏の無人島で藤丸立香が遊びつくしていましたとか後からそういう結果が出てきたら面白おかしい。実際に面白かったものだと言峰はまた肩を震わせる。

『いいか、次の特異点までに——』

「ああ、留意しておこう」

『ふん』

レフは一方的な通信を切った。

机に出てきたはずの魔術要素は消えている。カルデアがその通信魔術のようなものを使っていると理解しにくいだろうと言峰は理解していた。

だから裏切り行為はまだ、カルデアに漏れていないのだ。

なんせここは裏口に最も近い場所。心臓部分とは違う、カルデアが把握するには難しい位置で通信するように心がけているのだからと、言峰は考える。

カルデアがそれを把握していたとしても、裏切り行為をしていたと思われまいだろう。奴らがカルデアに攻めてきたかもしれないと誤解されるかもしれない。まあホームズにはいつかバレるかもだが、その時までには決着をつけてやろうかと言峰は考えていた。

「……哀れなものだな」

部屋の中で呟いた言葉は誰にも聞かれず消えていった。

しかし不意にコンコンと、誰かが扉を叩く音が聞こえて言峰は意識を切り替える。

ゆつくりと扉を開ければ——そこにいたのは不安げな様子の藤丸立香だった。

「……言峰さん、いつもの……いいかな?」

「もちろんだとも藤丸立香。さあ中へ」

「うん」

言峰は楽し気に藤丸立香を出迎えたのだった。

そうして彼は話を聞く。

特異点で協力してくれたサーヴァントのこと。勝ち進んでいったこと。不安なこと。泣きそうなこと。マシユのこと。

「あのね、言峰さん。特異点Fで立ちほだかったサーヴァントがいたんだけど、アーサー王……アルトリア・ペンドラゴンの……そのオルタの方がね、カルデアに召喚されたんだ」

「ほう？」

アルトリア・ペンドラゴンのオルタ。

食いしん坊で、赤いアーチャーがまだ来ないのかと何かを言っていたこと。あの特異点Fでの怖かった思い出が消えていくようだと話してくれた。

「そうか。トラウマを乗り越えたということか。頑張ったようだな、藤丸立香」

「うん！」

ただ一言、それを伝えるだけ。

言峰がいつものように褒めると藤丸は破顔したのだった。

とても楽しそうに、言峰に依存する藤丸立香がそこにいた。

第三話 危うく見えるのはどちらか

それは、ある日唐突に起きた。

——いや、藤丸立香が「アルトリア・ペンドラゴン・オルタを召喚した」といった時点でフラグは立っていたのだろう。そう言峰は考えた。

それはある日、ダヴィンチ氏に呼び出されたので言峰が向かった工房。そこにいたのはダヴィンチだけではなかった。何枚かの資料を手話し合う藤丸立香とマシユもそこにいた。

彼女らが部屋に居て何故現時点でカルデアの責任者となったロマン・アーキマンはいないのかと言峰が尋ねたが、彼は忙しさのあまり倒れそうだからと無理やり休ませたらしい。だから今はここに居ないのだという。

「よろしくお願いします。言峰さん！」

「……ああ」

マシユが元気よく話しかけたので言峰は頷き返した。

マシユ・キリエライト。彼女もまた藤丸立香と同じく言峰の部屋へやってくるカルデア職員の一人……の、ようなもの。

もちろん職員たちのように不安や泣き言をいうためにはない。

藤丸立香のように、絶対に周りには言えない弱みを漏らすためでもない。

それは、言峰が促したこと。

マスターと交流していった記憶を言峰自身と共に共有出来たらというもの。

言峰自身は記憶もあるのでこれから先マシユ・キリエライトが死ぬことなく生き延びることも知っているが、第三特異点へ行き終わった後であるため、現時点でまだマシユは己の寿命が残り僅かであると

思っていること。

一瞬、一秒も見逃すことのできない思い出を全部マシユにとって大好きな藤丸立香と共に経験し共有していきたいと思ひ全力で生きている。そう言峰は推察し、何か面白い部分はないかとマシユに話しかけたのだ。

なんせあの人類崩壊へ導いた元凶がマシユを気にしているようだから。

それ以外にも、あの——言峰には絶対に姿を見せないあのマリンに似た獣との交流。その接点を聞きたいがため。何かしら面白おかしい話も聞けるだろう。例えばレフが地団駄を踏んでいたあの爆笑しそうなほど理解不能なハロウィンとか。レフが八つ裂きにあつたこととか。そういう特異点での出来事をマシユに聞くようにした。

もちろんそれは藤丸立香と交流する前から出来るだけ話をしたいと言っておいたため。

怪しまれないよう、人理が崩壊する前にマシユが経験したことを言峰が知りたいと一言いえば、彼女は快く応じてくれた。

そうして毎日のように話をするようになって、マシユは楽しく笑うようになつた。最初の時に見た真顔ではない。藤丸立香と共に過ごすようになって変わっていったのだと理解する。酷くつまらない部分もあるが……。

マシユは言峰を信頼している。そう彼女の事を言峰自身は理解していた。

だから、今回ダヴィンチ工房に呼び出された内容は言峰にしかできないこと。

カルデアで使えない機能。

爆破でやられた部屋。

一部分電気が通らず外と温度が全く同じ氷点下で人が住める状況じゃない場所などのこと。

そういつた崩壊部分を回復させるため、言峰がカルデア全体の守護

を任されているからこそ把握しているだろうと考えてダヴィンチ氏が報告してほしいとのこと。

それについては言峰は了承し、サーヴァントならば修復できるだろう場所などについても藤丸立香やマッシュと通じて話し合う。

後でロマニにも話をするとのことだった。

そんな時、だった。

「貴様……！」

言峰は己の直感を信じ、半歩後ろへ下がった。

そこへ鋭い一閃が切り刻まれる。

言峰がいたはずの場所。避けたことによつて床は抉られ周囲にあつたダヴィンチが作り上げたいくつかの創作物が吹き飛んだ。

それにダヴィンチが悲鳴を上げるが——その攻撃の鋭さが途切れることはない。

そこにあつたのは、黒い剣。黒い鎧を身にまとつた、再臨されていない少女。

いや、黒騎士の王というべきか。そう、言峰は他人事のように考える。

言峰自身を攻撃しているのはアルトリア・ペンドラゴン・オルタ。どうにも藤丸立香に用があつたのか、彼女がダヴィンチ工房へ挨拶もなくやつてきた。そこで言峰を見た瞬間、攻撃してきたのだ。

不意打ちにも似た一撃二撃という連続攻撃に言峰は余裕を持つてそれを躲した。おそらくはまだオルタの方が再臨もしていない未熟な状態だからかもしれない、言峰は理解する。

そうしている間に急な騒動によるやく状況を理解したのか、慌てた様子の藤丸立香が両手を上げてオルタを見た。

「ちよつ!?! ち、ちよつとちよつと待つてオルタつ!?!」

「止めるな立香。アレはこのカルデアに居てはならない、敵でなくて

はならない存在だ」

「いや言峰さんは敵じゃないよー!」

「は、はい! 先輩の言うように言峰さんは敵ではありません。カルデアを守護する味方のサーヴァントです!」

「サーヴァントだと?」

眉をひそめたオルタに、言峰は己自身がラスプーチンの疑似サーヴァントとして召喚されたことを明かす。

「……立香。いや、マスター。この男を信じるな」

「なんで!? いや、待って。オルタは急に何を言ってるの? 言峰さんは初対面じゃないの?」

困惑気味の立香に対し、オルタは「奴が生前の頃だが、以前召喚された時にいた男で、ただの敵だ」という。

口数少ないのはオルタなせいか。それとも藤丸立香とはまだ絆が結ばれていないのか。

「アルトリア・ペンドラゴン・オルタ。君の言いたいことは分かった。でもここでの戦闘は許可していないよ。ラスプーチンと喧嘩したいというのなら専用の場所でやってくれ。もちろん止める時は止めるがね!」

ダヴィンチがオルタを諫める。

これ以上武器を使つての攻撃は許さないと言外に伝えたおかげか、殺気立つオルタがこれ以上言峰自身へ向かうことはない。

言峰にとつては、アルトリア・ペンドラゴン・オルタは敵ではなかった。まだレベルが上がっていないせいだ。それとも聖杯が捧げられていないためか。

動きが鈍いなど観察していて分かったこと。

ならば言峰はこの状況を楽しむことにした。

さてこの状況で藤丸立香はどう行動するのか。言峰たる自分自身を怪しむか。それともオルタのことを信じないか。どちらにしてもカルデア内部での亀裂が入るだろう。

現状——カルデアの中心は藤丸立香となっているのだから。

そう、内心で笑っていた時に、オルタが言峰の心情を察したのか睨みつけてくる。

「……喧嘩をしたいわけじゃない。殺したいのだ、この男を」

「絶対に駄目！ 言峰さんは良い人なんだから、絶対にだめ！」

「何故だマスター。奴を生かせばいつか取り返しをつかないことになるぞ」

「それでも駄目!!」

藤丸は叫ぶ。

「オルタと一緒に交流してきてるから分かるよ。オルタが嘘をつかないってことを！ オルタが言うように、言峰さんが悪い人な一面を持ってらんだって。でも私は、言峰さんと話してきた。その日々は忘れられない！ あの夜に話してくれた尊い一言を、私は忘れない！」

オルタのことを信じ、裏切られたとしても。

それでもなお、藤丸立香は真っ直ぐに伝えてくるのだ。

「私は言峰さんに救われたんだ。だから私は信じたい。オルタが言うように悪い部分があっても、そこも受け入れる。受け入れてなお、ラプーチンとして召喚された言峰さんを信じる！」

真っ直ぐに輝かしくも眩しいその言動を、言峰は静かに聞いていた。

今までやってきた行動の中に悪要素も何も含まれていないのならオルタの言う言葉は信じれないというもの。しかしどちらの意見も

信じ、どちらでも受け入れると言った。

疑心暗鬼にもならないかと、言峰は少しだけ藤丸立香に落胆した。

まあ玩具候補からは外れていないが。

自分に対して真つ直ぐであること。

受け入れていること。信じていると言った相手が裏切った場合はどう反応するのか。またその後敵だと思っていたら実は味方だと分かっただらどうなるのか。二転三転する状況での反応がとても楽しみだと、言峰は薄ら笑う。

自分が依存させるようにしたのだから自分に味方するだろうとは思っていたのだ。オルタの意見を聞き入れた上で反論したのは予想の斜め上だったが……。

オルタはつまらないような顔で「私は忠告したぞ」という。

おそらく言峰に対して隙あらば攻撃してくることもあるだろう。ダヴィンチも思うことはあるようだ。

——さて、これからどうなるか。

そう、言峰は内心で笑った。

現段階でオルタにならちよつかい出してもいいかと、彼はアルトリア・ペンドラゴン・オルタに近づくようになった。

それがある意味、失敗だったのだ。

第四話 私のサーヴァントにする

藤丸立香にとって言峰綺礼は自分の心の支えだ。

マシユにすら明かすことのできない不安。弱み。それら全てをさらけ出しても呆れることなく静かに聞いてくれる。

だから藤丸立香はどうしようもなくなくなった時に彼の元へ訪れる。それをよく思っていないサーヴァントは複数いた。

あのアルトリア・ペンドラゴン・オルタは「どうなっても知らないぞ」と言い、キャスターのクー・フリーンは「あの野郎がサーヴァントになったことで少しマシになったかと思つたが……ありやあ違うな。近づかねえほうがいいぞ」と忠告する。もちろん他の危険そうなサーヴァントに関しても言及し、必要なら一人で近づかない。自分等も呼べなど、藤丸にとつては二人は特に仲良くなつたという自覚があるからか、藤丸自身に対してお節介を焼いてくれることもしばしば。

二人は第五次聖杯戦争に召喚されたサーヴァントの別側面。

しかし彼らは言峰綺礼のことを「奴は生前、第五次にて悪党っぷりを見せた奴」と評価する。他の敵対していたことのあるサーヴァント、狂化の入つてそうな危険人物などには注意するよう言うが、それと同じく言峰も危険だということ。

絶対に目を離してはならない人物でもあり、危険な男であるのだと。

それは、藤丸立香にとって理解できない言葉だった。

だって、言峰がいなかったらずっとこの重たくも苦しい感情を抱え我慢し最後まで走り抜いていただろうから。

これが当たり前のことだと思つて、いつか誰かと交代するような代役マスターだと分かつていてもなおその不安を押し潰し理想的なマスターとして生き抜く決意をする。

不安を口にはいけけない。

嫌なことも全て飲み込んで、前線へ立つのだと。

生き残らなきゃいけないから諦めるわけにはいかない。だから立ち続けなきゃいけない。

そう思っていた心を殺したのが——我慢しなければと耐え続けていた藤丸立香のことを褒めてくれた。同情なんてものはなく、それが至極当然というように「休んでもいいんだぞ」と言ってくれたのが言峰だったから。

だからカルデアの守護を任すのならもつと別のサーヴァントにした方がいいとお節介染み忠告を言った彼らの言葉に首を傾げるしかない。

特異点を歩いて、経験して。そうして見えた様々な人の悪い部分。それは藤丸と協力し召喚に応じてくれたサーヴァント達。忠告してくれた二人だって同じなのに。

ジル・ド・レエがセイバークラスとキャスタークラスの両方が召喚された時、彼らも言峰に対するものと似たことを言う。注意しろと言うけれど、あつさりしたもの。一人になるなどいつて忠告し、気にかけるだけ。殺そうとはしない。

絆が深まっているためいろいろ気にかけてくれるからなのか。イアソンが来てもそうだろう。

他のサーヴァントだって、きつと彼らは藤丸が一人で対応する時にさりげなく注意しながらも受け入れる。

そういったことが、言峰に対しては出来ないのだと藤丸は気がついた。

見て見ぬふりはできない。

特異点に居たときに悪役だったサーヴァントがいてもそこまで警戒しなかったのに、何もしていない言峰には「どうなっても知らないぞ」と、確実に裏切るようなことを言う。

裏切るのが当然のサーヴァントだと、そう思われているということか。

でも、話を聞いてもどれだけ悪いのか教えてくれても藤丸はそれが言峰さんのやったことなのかと結び付くことが出来ない。言峰さん

に似た他人なのではないかと思ってしまうぐらいだ。なんせ言峰さんはラスプーチンの疑似サーヴァントなのだから。

——そう、藤丸は考える。二人が説明してくれた内容を思い出しながらも首を傾げる。

言峰さんは悪い人か、それとも良い人か。

(うーん……言峰さん以外にも、そういう警戒しなきゃ系のサーヴァントはいるとか言ってたけどなあ……まだ召喚されないからかな。キャスターのクー・フリーンが言ってた金ぴか？ 英雄王？)

トコトコと、藤丸は廊下を歩きながら考える。

カルデアにいるサーヴァントはまだ少ない。

部屋の修復と機械の復旧が出来てきたからそろそろ大規模な召喚でもしようといわれているが……と、藤丸はこれから先のことを思い浮かべた。

召喚する時に奇跡が起きて、英雄王が来れば分かるだろうか。

生前の言峰綺礼がどれだけ悪い人だったのか。警戒しなくてはならないサーヴァントかを。

藤丸立香は分からない。

真正面から言峰に裏切るか聞いたとしても「君がそう思うのならそうなんだろう」と、曖昧なことしか言わない。

それでも、藤丸は信じたいたいのだ。

裏切るのなら、いつものように倒してまた連れ戻すだけ。ずっとずっと、そうやって前へ進んできたのだから。

様々な悲しいことがあっても絶対と言峰綺礼を離したくはない。

それだけ言峰に依存しまくっている。

それはマシユだっけと同じだ。マシユにとってはロマニ・アーキマンやダヴィンチと同じく傍にいてくれたサーヴァント。

話していた時間は短くとも、藤丸立香と同じく忘れてはならない大切な思い出だと認識しているようだ、藤丸立香はマシユについてそう理解する。

マシユもまた、藤丸と同じく何か救われるような言葉を言ってくれたのではないかと思えたから。

「……あれ？」

考えながら歩いていたら時だった。

不意に廊下の先にジャンヌ・オルタの後姿が見えたのだ。

藤丸は少し考えてから彼女に向かって駆けた。

「ジャンヌ・オルタ！ ちょっといいかな？」

「……はあ、急に何よマスター。アンタこれからあの疑似神父の元に行くんじゃないか？」

「言峰さんの所に行く前にやることであって……それが終わったら行くことと思ってるの！」

「やること？」

「カルデアに少し余裕が出てきたから一人か二人召喚することになったんだ。できればいろいろ知ってそうな英雄王がいいなって思ってる」

「へえ、そう……まあ、私には関係のないことですが……」

「それでね、ジャンヌ・オルタに聞きたいことがあって……」

「聞きたいこと？」

「言峰さんについて」

何でこんなにも言峰を信じられるのかと藤丸立香は考えたことがあった。

そうして出た答えは複数ある。

言峰綺礼は、最も欲しい言葉をくれて救ってくれる人。

自分が前を向いて共に戦ってくれる仲間ではない、カルデアの守護を任されたサーヴァント——いわば、自分たちの家を守ってくれる頼もしいサーヴァントだからだろう。

自分は言峰さんが大好きだ。そう堂々と言えるぐらいには信じて

いるのだから。

でもアルトリア・ペンドラゴン・オルタとキャスターのクー・フーリンは違う。

肯定と否定。ならば彼を全く知らない人なら？

「どうでもいいわ……と、言いたいですけど。いいわ、答えてあげる。

あのコトミネって男はあれね」

「あれ？」

「ジルに似てるわ。あの男」

その言葉に、藤丸は目を見開いた。

「何かに依存して、何かのために動いて。それで、どうでもいいものの為に己の身すら崩壊させてしまう。そんな雰囲気を感じるわ」

「……そっか」

藤丸は目を閉じた。

関わりの少ないジャンヌ・オルタもそう言った。二人と同じようなことを説明した。だから少しは警戒した方がいいかもしれない。

それでも、やっぱり無理だと——藤丸は首を横に振った。

「ありがとう、ジャンヌ・オルタ。やっぱり私は、言峰さんを信じる。それで本当に何かをしてくれて、カルデアを裏切ったとしても絶対に連れ戻す。それで私のサーヴァントにする。そう決めたよ！」

そもそも裏切らなければ起きない決意だから大丈夫だろうと藤丸は笑う。サーヴァントとなる前は違っても、今の言峰さんはジャンヌ・オルタの言うように危ういとしても、それでも信じたのだと。

まさか複数のサーヴァントにここまで警戒されているのに、裏切るわけではないだろうという気持ちもあった。

それを、ジャンヌ・オルタは鼻で笑う。

「じゃあ私、召喚してくるね！ 新しいサーヴァントが来ても仲良くするんだよ。ジャンヌ・オルター！」

「正規の私みたいなこと言ってるんじゃないわよ！」

出来れば来て欲しいのはキャスターのクー・フリーンが警戒しろと言った、言峰を知っていきそうな英雄王。

そのアーチャークラスの召喚を願って、藤丸は駆けた。

第五話 求めていたアーチャーじゃない

「こんにちは、カルデアのマスターさん」

「こ、んにちは？」

「ところでここにとつても面倒臭い神父を気取ったおじさんがいると思うんですけど、何処にいます？」

「あ、言峰さんの関係者の方？」

「はい、横暴な頃の僕ではないですが、僕が来た方が良いという予感があったので召喚されました。嫌な予感がしたので。主に大爆笑しながら大惨状という感じの……」

「大爆笑しながら大惨状？ ……ええと、君の名前は？」

「あ、僕はギルガメッシュ。気軽にギル君と呼んでくださいね。マスター」

にっこりと微笑んだその顔に、藤丸は少しだけ驚いた。

ある意味初めてだろうか。言峰さんの関係者だというのに、嫌悪感を抱かず自ら進んで関わろうとしてきてるのは。

望んでいたアーチャーとはちよつとだけ違う。でも、言峰の関係者なら藤丸にとつては運が良かったといえよう。それも英雄王の幼い頃の姿なのだから。

そう思っていたのだが、ギル君と呼んでほしい少年はちよつとだけ予想と違う動きをした。

ギル君が言峰さんに会いたいと言ったので藤丸自身の部屋に招待したのだ。

そこで言峰さんと会ったギル君は小さくため息を吐いた。

「あーあ。まさかあの言峰綺礼がここまで墮落しきってたとは思わなかったなあ」

「ほう？　この私が墮落か……」

「だって貴方は言峰綺礼だけど、ラスプーチンでもあって、違う『魂』でしょう？　言峰綺礼の名を借りた偽物に過ぎないじゃないですか。つまり言峰は何もせず見ているだけ。それで自分すらも愉悦してるってことじゃないですか」

藤丸は二人の話についていけない事実困惑する。いや、なんとなく言っている内容は分かる。しかし彼らの距離は近い。それでもって、藤丸からは遠い。

何かの線が引かれているかのように彼女は感じた。

少し気まずい思いをしている藤丸に気づいたのか、言峰は彼女の背中をポンツと叩いた。それに少し安心する藤丸。しかし藤丸自身の背中を叩いてくれた瞬間、ギル君の顔が歪んだのが見えた。

「フェイカーと名乗ったらどうか。ラスプーチン」

「……ふむ、当たらずも遠からずだな。流石は英雄王だ。しかしその名は辞退しよう。私はどんな『魂』をしようとも、ラスプーチンであったとしても、ガワは言峰綺礼なのでな」

「……本当に、あの横暴な頃の僕が来なくて良かったですね。いろんな意味で」

深いため息を吐いたギル君に向かって藤丸は口を開く。

「あの、ギル君。言峰さんは、何か大爆笑で大惨状な予感がしたっていったよね？」

「そうですねよマスター。言峰はそういう人で、かつ横暴な頃の僕が来たらまた面倒な事態になりますから」

「そっか……」

「怖くなりましたか？」

言峰が部屋のなかで話を聞いている。それでも彼について問いか

けてくるギル君は少し意地悪かもしれないと藤丸は思えた。

でもやっぱり藤丸は言峰のことを怖いとは思えない。そう考えながらも首を横に振る。

「あのねギル君。私に言峰さんのことを教えてくれると嬉しいな」

「藤丸立香。私がここにいるというのにこの小さな英雄王に聞くのかね？」

「だって言峰さんってば自分の過去を話したがないし……キヤスターのクー・フリーン達に話を聞いても変な顔して悪いことばかり話すだけだから……でも悪いことでもいいからたくさん聞いてみたい。言峰さんが生きていた頃を知って、いつか恩返しをしたいから！」

相手を知ることと絆が深まる。そう藤丸立香は思っている。でも断言した藤丸を、言峰とギル君の二人は薄ら笑いで返した。

ちよつとだけ嫌な感じの笑みだった。

「今回のマスターは真っ直ぐすぎる良い子ですね」

そう言ったギル君が、ゆつくりと話してくれた。

その間、いつの間にか言峰の姿が消える。そういえばこの時間は見回りの仕事だったなど、藤丸は言峰のルーティーンを思い出した。

言峰がいないのならと、藤丸はギル君の話に集中する。

それは、とある日の出来事。習慣化している神父としての活動。そして聖杯戦争で起こした悪役としての全てを。

キヤスターのクー・フリーン達から聞いていた話と似ているけれど、ちよつとだけ違う。

「なんか、共犯者側から話してるみたいな……」

「横暴な頃の僕と言峰の話ですからね。そりゃあそうなりますよ。あつ、そうだマスター。もしかしてと思ったんですが、またすぐ召喚

「しますか？」

「えっ、うん。良く分かったね？ あと一人、召喚するつもりだよ。ギル君が来てくれたから次はランサーかな」

第六話 彼はライナスの毛布である

——それは、少し前に遡る。

ロマニ・アーキマンが言峰に対して出し忘れていた書類、それを渡しに向かった部屋で見てしまったのは、カルデアを裏切ったレフと通信している言峰の姿。

それに彼は目を見開き驚愕した。

そこから起きたのは上を下への大騒ぎ。なんせレフとの通信を切った言峰が涼しげな顔で「どうかしたのかね、ロマニ・アーキマン」といつものごとく声をかけてきたのだから。

普通だったら取り繕うぐらいはするんじゃないか。

慌てもせず何故いつもと同じように声をかけるのか。

いや、少し笑っているように見えるが、気のせいか？

混乱しきったロマニは、言峰に対し恐怖を覚える。「体調でも悪いのかね」とふざけたことを言いながら一歩近づいて来た彼に対し悲鳴を上げた。

女性が出すような甲高いものだった。

それに驚いたカルデア中の人たちが悲鳴を上げた場所へ駆けつけてきた。

そうして事態が明かされる。

部屋の中にいる言峰を数人のサーヴァントが警戒しながら囲む。キャスターのクー・フリーン、アルトリア・ペンドラゴン・オルタは当然ながらいろいろ複雑そうに男を見つめている。

子供の姿のギルガメッシュは周りより少し後ろから眺めつつ、壁に背中を寄りかからせながら傍観しているようだった。

それ以外には、部屋の外側からだと言峰に世話になったことのあるマリー達が心配そうに彼を見つめ、作家系のアンデルセンらはペンを片手に「まさにありきたりだ。駄作過ぎる展開だな！」と酷評しながら

らも何かをメモしている様子。

「……信じられない」

「立香ちゃん」

「だって、さつきまで一緒に居て、話もしてて……なのにそんなこと。ドクターが寝ぼけて言峰さんが裏切ったような白昼夢を見たっていう方が信じられるぐらいだよー」

「立香ちゃん!？」

「あつ、ごめんなさいドクター……でも本当に、信じられなくて……」

「はい、先輩の言う通りです。私も、言峰さんが敵と通信していただなんて信じられません……」

「……残念だけど本当だよ。僕はちゃんとこの目で見たんだ」

落ち込んだ様子の立香とマシユにロマニは何も言えなくなってしまった。

ロマニ自身もまた驚きを隠せないでいるから。

ダ・ヴィンチは何かを考え込んでいる様子だったが、ロマニもまた考えたいことがあった。

「言峰綺礼……いや、疑似サーヴァントのラスプーチン。何か弁明したいことはあるかい？」

「いや、全く」

ロマニの言葉に言峰は首を横に振る。

冷静に周りを観察するような彼に対し、本当は何もやってないのではないかと錯覚させられる。犯人として扱われているというのにな、魔術師によつてはこれぐらいの裏切り行為。非道さなんてものが欠片も感じられない時点でまだマシな方だろうか……。

不意に、ダ・ヴィンチが言峰に向かって話しかけた。

「……じゃあ何でかな、ラスプーチン。君は周りをよく見ている方だ。

ロマンが書類を出し忘れていたことも、だいたいどのくらいの時間に部屋へやってくるのかもわかっていたはずだろ？」

「えっ」

ロマンが首を傾けるが——すぐさまハツと思い返した。

そういえば以前、言峰に出し忘れていた書類を持って部屋へ駆けつけたことがあった。その時に甘いココアを作り終えたばかりの言峰がいて「来ると思っていたぞ」と少しだけ微笑みかけてきたことがあった。

それは一度や二度だけじゃない。ロマン自身もどうにかしなきゃいけないとは思うが……書類だけではなく報告忘れなどで言峰の元へ向かった際も必ずと言っていいほどココアを作って待っていてくれる。まるで千里眼でも持っているかのように……。

「何でこんなあからさまに裏切っているのだと見せた？」

「言っている意味が分からないな」

ダ・ヴィンチの言葉に言峰はふざけたことを言う。

何が何でも言わないつもりだろうかと——ロマンが歯ぎしりした時だった。

「もう止めようよ……」

喉を震わせた藤丸が、言峰を背に庇い周りを見てきたのだ。

「言峰さんのことを責めるのは止めよう。裏切ったかもしれないけれど……でもカルデアはまだ被害を被ってないでしょ？」

「立香ちゃん。たぶんそれはまだ表に出てないだけでももしかしたら……」

「でも！ 私は、わたしは……!!」

「先輩……」

敵を前にした藤丸立香は諦めず立ち向かう。

いや、絶体絶命な状況である場合は分からないことも多いが、様々なサーヴァントたちと共に協力し修羅場を経験しここまで生きてきた。

キヤスターのクー・フリーン達から聞いていたからこそその覚悟はあったはずだ。

それはロマニも分かっていた。それでも立香はきつと立ち上がれると――。

ロマニ・アーキマンは分かったのだ。

誰もが心の弱さを持っている。

絶対に折れてしまうような弱点を抱えて生きている。

必死に抱えて、不安などを全て心の中に詰め込んで生きてきた立香のことをロマニは知っていた。でも自分は立香を前線へ向かわせた責任がある。

だからこそ、言えないこともあった。

隠していたこともあった。

言峰は立香に寄り添い、不安を全て消してくれた存在だ。

だからこそ、立香は言峰に依存していた。彼が居たからこそまで立ち上がったのだと思えた部分もあったかもしれない、いわゆる幼少期に手放せないライナスの毛布のような役割を彼が持っていたのはと、ロマニは察してしまい表情を曇らせた。

それはマシユも同じく、立香の気持ちを理解しているからこそ言峰を責め立てたくはないと思ってしまうんだろう。

ダ・ヴィンチはまだ何かを考えている様子だったが……。

「はあ……マスター。警戒していても仕方がないだろう。この男を庇い立てするな」

「で、でも……」

何も言えないでいる立香に対し、アルトリア・ペンドラゴン・オルタは言峰を睨みながら言った。

それに賛同したのはキャスターのクー・フリーンだ。

「こいつの言う通りだぜ嬢ちゃん。裏切ったのは事実だろ。何を企んでいるのかは知らねえが……やったことを庇い立てしても何の得にもなりはしねえよ。そんなことをして得するのは言峰の野郎だけだ」

立香は何も言わない。

でもそれでも、言峰を背に庇ったまま。言峰は何もしてはいない。こんなにも人類最後のマスターが無防備に背を向けているというのに——いや、アルトリア・ペンドラゴン・オルタなどがあるせいだろうか。攻撃すればきつとすぐ反撃されると理解していて何もしないのか。

ロマニは言峰を観察する。

彼の考えていることが分からないのだ。何故こんな騒動を引き起こしたのかすらも理解できない。

彼が何をしたいのか、ロマニ・アーキマンは想像がつかない。

言峰がこの場に居て、何も言わないというのに場を引っかきまわしているような違和感があるせいだろうか。それとも彼が何をしたいのか理解できずにいるからか。

知らないというのは怖い事ばかりだ。

だからロマニは選択した。甘く優しい決断を。

「……しばらくはここに待機してもらおう。後で尋問はするからね、言峰綺礼」

しょうがないからと一度部屋から離れることになった。

風魔小太郎に彼の見張りを任せてもらいながらも——と、立香たちに納得してもらいつつ一度言峰から離れて部屋を出た。

「……少し休もう。それからもう一度話をしよう。その方がいい。僕たちは今、冷静でいられないだろうから」

「……はい」

「何ともまあ甘ったるいな。そんなんじや奴に隙を作るだけだぜ」

「じゃあどうしようって言うんだい。キャスターのクー・フリーン。彼はここから逃げられるわけじゃないよ。隙なんてどこにもない。今やるべきことは僕たちが冷静になることだ」

その時はまだ、理解していなかったのだろう。

——ある意味、キャスターのクー・フリーンが言っていた内容は当たっていたのだ。

ここはカルデア。

密閉空間でもある場所。ならばどこかへ逃げられるわけじゃない。アサシンのサーヴァントが見張りについてくれている。それならば大丈夫だろうという甘えがあった。

何よりも、カルデアで積極的に協力してくれていた言峰が派手にやらかすとは思っていなかったのだから。

「言峰が消えた!?!」

「えっ?」

第七話 使い勝手のいい道具

いわゆるちよつとした刺激を求めて、ちよつとした失態を行った風を装った。

何故それをやったのかと言えば、言峰自身を警戒するサーヴァントたちから殺意が消えて困惑へ移行し、また疑念の色が見え始めたからである。

何故かと言われれば、それは様々なサーヴァントたちが召喚され始めたから。

流石にまだ第五次陣営は召喚されていない。しかしアンデルセン達から月の聖杯戦争で運営NPCとしてやら、購買店員として働かされてたりやらとしていた話を聞いたらしい。

それ以外にもあるイベ関連にて召喚された魔法少女なイリヤスフィールに驚かれた顔で「ラーメン屋のおじさん!？」と叫ばれた記憶があった。

つまり、並行世界によつて言峰の立場が変わるということ。

英霊にもそういう存在はあるだろう。カルデアが人理崩壊する前から召喚に応じて協力していたことをそこまで警戒しなくてもいいと思われたらしい。

言峰自身に対する評価が善人であるだろうという疑念へ変わっていったのだ。

これで裏切ったらどうなるだろうかと言峰は考えるより先に行動へ移ってしまった。先走ったのだ。

これで追放処分のような扱いを受けて座へ強制送還されたとしても構わなかった。なんせ面白かったから。第五次の「やっぱりか」という呆れたような顔。幼少期のギルガメッシュは真顔だったのが懸念点だが、藤丸とマッシュにちよつとした絶望顔を拝むことが出来たのは楽しかったといえよう。そう言峰は行動したことに後悔はなかった。

どうせ裏切るのだ。ならばそれが早いのか遅いのかというだけ。部屋に監禁状態であつても構わなかつた。それぐらいの覚悟はあつた。

しかし——部屋で待機していた言峰に襲い掛かつたのは突然のレイシフトにも似た何か。急に時代を超えたように感じたものだった。

これはレフの仕業ではない。聖杯によるイベントのような面白おかしい何かが起きた様子でもなかつた。そう言峰は理解している。ならばこれは誰がやったのか。考えるより先に結論付けたのだ。

——ゲーティアが言峰をどこかへ送つたのだと。

「……………ふむ」

正直に言って自分をどこぞへレイシフトさせる必要性を感じてはなかつた。だがゲーティアは強行した。カルデアで監視されていた、現在最も疑わしいと思われた言峰自身を。

何かしらの役割を与えて動かそうというのか。

それとも未だに藤丸立香やマッシュ・キリエライトに好かれているからか。

まあ再会したとしても、言峰に対して依存しまくつた状態のままだとは思えないが……………。

惜しいのか、自分自身が。

言峰自身がカルデアでやっていた行為。何か言峰自身の存在がカルデアに攻撃できるものだと考えているのか。

いや、ゲーティアが自分自身をそこまで評価しているわけではないはず。

戒めか、それともちゃんと裏切つて仕事しろとでもいうのか。

「……………ここで考えていても仕方がない」

現在言峰は森の中にいた。

神父服の姿で歩くには少し面倒ではあったが、力技で押し切った。少し歩いてみて理解した。

言峰にとつてそれは、少しばかり予想外であったもの。レイシフト先で見た景色に言峰は噛いが止まらなくなった。

なんせ気が付いたらウルクに飛ばされていたのだから。

第八話 出会ったのが不運

眩しい太陽。晴天の空。

未だに森の中だが、遠くにウルクの国が見える。川を超えた場所。少しばかり見下ろす形になっているが、距離と地理的に考えてここはエビフ山だろうか。反対側である可能性もあつたが……。

「さて、味方として姿を見せるべきか。それとも敵として潜伏し悪行を尽くすか……」

正直に言つて、ここから先はどうするべきなのかについて言峰は悩んでいた。

なんせ急なレイシフトでウルクへ送られてきたこと。それを行つたゲーティアがこちらに何かを言うこともなく放置した状態であるということ。

そもそもこの突発的なレイシフトは本当にゲーティアが行なったことだろうか。

言峰は少しだけ考えて、すぐさま思考を切り替えた。

不意に、空から何かがやってくるのが見えたから——。

輝かしいほどの星のようなもの。

青くて、赤いもの。

それはこちらへ一直線に舞い降りてくる。ゆつくりと下降してきたのならどこぞの藤丸立香であれば天女か何かと勘違いしていたかもしれない。それぐらい周囲が輝いているように見えた。もちろん見た目の話であつて、中身は別だろうか……。

そう、言峰は考えながら彼女を真顔で観察する。

周囲に突風が吹き荒れる。

木々が揺れ、葉っぱが千切れて落ちていく。環境破壊の一つとなつたそれを気にせず彼女は言峰の方を睨んだ。

「アンタこんなところで何やってんのよー!!」

「……ああ、凜か」

「はあ!? 私はリンなんて名前じゃないわ! 私はイシュタル、美の女神にして金星を司るものよー!」

「そうか、凜はここで何をしている?」

「だからリンじゃないって言ってるでしょ! ってそうだ、アンタ何でここに居るのよ! ……いえ、いえ、アナタのことは私は知らないわ。でもなんかこう、本能がこいつだけは絶対に信用するな。許すな。指一本でも動いたら絶対に仕留めろって囁いてるのよ! アンタ、私に何かしたの?」

「いいや、まだ何もしていないが?」

何をしているのかと言われれば、それはこちらの台詞だと言峰は考える。

しかし好都合ではあった。

記憶の中に眠る臆気だが理解できた前世の知識。その中であつたイシュタルの立ち位置。一応は味方だが、ゲームでの藤丸立香から一時期、三女神同盟として敵と見られていたことがあつたはず。言峰はそう考えて思考を回した。

「凜——いや、その名は呼んでほしくないのだったな、イシュタル。まさしく豊穡。木の葉が散り揺らめくにふさわしい。宝石のように派手な金星の女神よ」

「……それ皮肉よね? 絶対にそうよね? なんかアンタに仰々しく言われると腹が立つのよね。褒められた気がしないわ。馬鹿にするなら打つわよ」

「馬鹿になどしていない。それよりも君はなぜここに居る?」

「アンタに話すほど暇じゃないの。私はウルクの守護神でもあるんだから」

「なら何故こちらへ降りて来た。私に話しかけるにしても視線が地面へ向いているな。何かを探しているのか?」

言峰の声に、イシュタルは言葉を詰まらせた。少し殺意が滲み、このままでは言峰を殺しにかかるのも時間の問題だと彼は察する。

安心してくれと、言峰はイシュタルを落ち着かせようと動いた。

何か困りごとがあれば遠慮なく話すといい。そういえば、イシュタルは胡散臭そうな顔でこちらを見るだけ。

「じゃあ聞くけど、アンタはぐれサーヴァントってわけじゃないわよね?」

「ふむ。とある事情でこちらへやってきた……カルデアの者だ」

「あっそう。カルデアね」

「それで、君は一体何を探しているのか、聞いても構わないか」

「それは……私はただ……ちよつと、探し物をしているというか。もしかしたらここにあるかもしれないからって見ただけよ。別に困ってなんてないわ」

「そうかね。なら私は手伝わない方がいいか——」

「別に手伝ってもいいのよ! ……って、待って。アンタはちよつと……なんだか本能に訴えかけてくるのよね。アンタは絶対に裏切る。私の探し物をパクるって……」

「それ程まで疑うのなら、約束してやってもいいぞ。探し物を見つけ次第、それをイシュタルに返すと」

「う、うう……ずつと探してるのに見つけられないし……かといってウルクの民にやらせるとアイツに伝えられる可能性が大きい。他は頼れないし……うーん……でもこいつは……」

悩み切った末に、イシュタルはこちらを睨む。

それだけ大事にしていたものだということだろう。そう言峰は理解した。イシュタルが探しているのはおそらく、あのグガランナだということも。

「……ふん。勝手に探したらいいじゃない。アンタの事なんて信用し

ないわ。それとこれは忠告よ、アンタがここで何かするなら私が黙っ
ちやいないから。隠れて何してようともね！」

そう言った彼女は言峰を一度睨んでからどこかへ去っていく。

警戒されているなど、言峰はイシユタルが己自身に対する評価を理
解した。

おそらくは依り代としての無意識の反応が言峰を見ただけで敵対
心を抱いたのか。

言峰が何かをすればきつとすぐさま反応し敵対することだろう。
そう彼は彼女のことを理解した。

「——さて」

言峰は空の彼方へ飛んでいったイシユタルから目を逸らし、前へ向
いて歩き出した。

第九話 暗躍と日常

ひとまず住処をどうにかしようと思いいウルク市街へ向かうことに決めた。

ウルクに住む民とは違う珍しい服装から警戒はされたが、ギルガメツシユがサーヴァントを召喚していたこともあつてか、ある程度話をして「困っていることはないか？」と聞いたらいくつかの仕事を幹旋してくれた。

おそらくギルガメツシユに報告はされているのだろう。いや、確実にされていると言峰は理解しつつもウルク市街で働く日々を送っていた。

おそらく王に対して——怪しい服を着た見知らぬ男が外部から来たと告げているはず。

ギルガメツシユに対しての懸念点はある。

言峰はただそれだけに悩んでいたが、ただ立ち止まっても仕方がないのだと思考を切り替えた。覚悟を決めたのだ。

己自身が本物の言峰綺礼ではないこと。偽物であるが故の敵対はされるかもしれぬという可能性。それはカルデアに召喚された幼少期のギルガメツシユと話して理解したことだ。

言峰綺礼としての記憶に流れる——あの冬木で召喚された大人な方のアーチャーのギルガメツシユが召喚されるのなら、自分を殺しに来るだろうという可能性が高いことも理解していた。

まあ、もしもカルデアにて子ギルではなく通常の英雄王が召喚されて自分自身が殺された場合、ギルガメツシユに対する警戒心を藤丸立香が抱いていた可能性もあり、カルデア内でいくつか絆に溝ができたかもしれないのでそこも愉悦できるだろうと気にしていなかった。そう言峰は内心、頬を吊り上げる。

「…………ふむ」

仕事は出来るということでもひとまず住処は与えられた。

ついでにと服もウルクの民が着ている一般的なものに着替えて一般人に見えるように擬態したつもりだ。そのため一般的な男性の服装であるズボンのみ。上半身裸で過ごしている。

まあ分かる者にはわかるだろうが。

やりたいこともあった。それはいくつかの暗躍。

ある程度ウルクの国を働きながら探った結果、こちらを見つめる目があることに気づく。その視線を追って森の中に入ってみるとエルキドウの姿をしたキングウに会うことが出来た。

「ついて来い。母さんに会わせる。言っておくが、何かしたら……」
「ああ。分かっているとも」

やはりと、言峰は理解した。

敵側としてキングウと協力しろということだろう。だからレイシフトされたのかと。

キングウが言うにはティアマトとしての役割を被せられた『彼女』の世話をしろとのこと。腹が減ったら食事を手配し、命じられるがままに動けという。

とりあえずそれはウルク市街で動く以上は出来ることじゃないと断り、いつものようにスパイの真似事であれば出来ると言っておいた。

キングウはこちらを睨んできたがギルガメツシュの近くで動けることがどれだけ重要かわかっているのか拒否されることはなかった。ギルガメツシュがやっていることについて伝えろと言われたのでそれには了承しておく。

あとその日が来た時にはいろいろ扱き使ってやるからとも言われたので、言峰は涼しげな顔で頷いておいた。

まだキングウは言峰の事を信頼しきっていない様子だったが、接していく内にその警戒心の解き方が分かってきた為、それを解き解すよ

うに動いた。

キングウは言峰に対して何度も文句を言っていたが、次第に諦めが入っていったのか、言峰が近寄っても何も文句を言わなくなった。

それを狙っていたのだ、言峰は。

ウルク市街で働きつつもキングウに命じられたことはやる。

ウルクの民を殺戮しろという言葉には「ほう？ それはそれは……確かに私という獅子身中の虫を用いればウルクの勢いを大幅に削ぐことが可能だろう。それこそお前の『母』やその子達による無計画にして無秩序なちよつかいより余程効率的に、な」と煽ってやったらキレて攻撃してきたこともあった。が、相当この皮肉が堪えたのだろう。キングウから無茶ぶりを命じられることはなくなった。

あの『彼女』については、言峰は慎重に動くことにした。

キングウだけでなく『彼女』も言峰自身を見下す。それは言峰も理解している。

もしもキングウのように藪をつつけば文字通り巨大な蛇が出てきそうだから。なので彼女には最大の警戒をしつつ、従順さを装って動くことを言峰は決めたのだ。

平和すぎる日常に何かが起きる気配はない。

未だギルガメッシュから「来い」という命令もなく、何かしらの反応も来ないのだ。

敵対もされず、何かを言われることはない。放っておいて構わない程度の雑兵だと思われるのだろう。

ただ、監視はされているようだった。

たまに森の中に入っていく言峰は、その背中に視線を感じることがあったから。

しかし監視をしても構わないと言峰は鼻で笑う。

森の中まで追いかけてきても、意味はないのだから。

なんせキングウと話していたのはウルクに入ってからすぐの頃。そこでも監視の目があったとしても問題は無い。だから堂々と動くことにした。

言峰にとって真の意味で味方と呼べる者など存在しない。遍く全

ては己の歪んだ欲求を満たすための贅に過ぎない。ひとまずの目標としてゲーティアを盛大に裏切ること決めていた。だから最終的にギルガメツシュを勝たせればいいのだろうと思っていたから。

もちろん気分が変われば藤丸立香と敵対する可能性も無きにしても非ずだが……。

それはその時の状況。その日の気分。そして言峰がやるべきことを終えた時に見えた周りの状況による。愉悦が可能な面白おかしい立ち位置を狙うため、言峰は毎日ウルクのために尽くした。

そうして、気づいたのだ。

「順調だな……」

現在言峰が密かにやろうとしていたのは、ちよつとした布教。

食事に出されたものの中に豆があるのなら、豆腐が作れやしないかと模索することに決めて動いていたからだった。

第十話 一方その頃カルデアでは

言峰がカルデア内から消えた。

全員で探しても何処にもいない。ただ部屋の中で微かに魔術を使用した跡が残っており、そこからどこかへ逃げて行ったのかと結論が出された。

しかし、キャスターのうち誰かが気づいたのだ。

藤丸立香は最初にそれを口に出して言ったのが誰なのか覚えてはいない。ただその衝撃的な内容に眉を顰めるぐらいしかできなかった。拳を握りしめ、不安を堪えるぐらいしか自分にはできなかったのだ。

——言峰綺礼が、無理やり何処かの場所へ連れ去られたんじゃないかと。

強制を伴った魔術だったらしい。自分の意思とは無関係に行われるもの。

あの後彼の部屋を徹底的に調べて分かったのは、それ以外にもあった。まさかと思われる、とても大事なこと。

ロマニ・アーキマンが遭遇したあの裏切り者のレフと行っていたらしい通信に関して一方通行。強制的なものだったと……。

もしかしたらと、藤丸立香は希望する。

マシユと話をしていても、彼女も同じ結論を出した。

希望的観測だが——言峰綺礼は、自ら望んで裏切り行為を行ったわけじゃないのかもしれないと。

そんな考えを否定するのは、言峰を知るサーヴァントたちだった。

「あの野郎を心配するだけ無駄だぜマスター。あいつはただ、嘲笑ってんだらうよ」

「……うーん。そうかな？ あの人が嘲笑ってるように思えないんだよね、ランサーのクー・フリーン。君もそうだけど、キャスターのクー・フリーンもそうだったよ。どうにも私やマシユ達の知る言峰さ

んと君たちの知る言峰綺礼は別みたいに感じるぐらいだよ」

あの後召喚してきてくれたのは、第五次に関連する英霊たち。

ランサーのクー・フリーリンも同じく、カルデアのキツチンを担当してくれたアーチャーのエミヤも、よくご飯を食べているけれどいざという時は頼もしいセイバーのアルトリア・ペンドラゴンだって来てくれた。

それ以外の人たちも——第五次聖杯戦争に関係する英霊はほぼ全員が召喚されたと言っているいい状況だった。

唯一来ていないのはアーチャーのギルガメッシュぐらいだろうか。そしてこのカルデアに言峰はいない。

彼ら、彼女らは以前起きた騒動を知り、言峰に関してなんともいえない表情を浮かべていた。

「……皆が何と言ってもね。やっぱり私は言峰さんは裏切っていないって信じたいんだと思う」

「マスター。お節介かもしれませんが……現状を察するに、彼に関してそれは……」

「分かっているよアルトリア。でも言峰さんはあの時、裏切ったなんてはつきり断言しなかったから……」

ロマニ・アーキマンが遭遇した騒動。言峰がまだカルデアにいたあの最後の数時間で起こした尋問でも、彼は裏切ったとは言わなかった。

否定しなかった。でも肯定だってしなかった。

裏切りしているわけじゃないかもしれないという願いはきくと、言峰が何も言わなかったせいだろうと藤丸立香は理解する。

藤丸立香は自分自身でもそれがあり得ないと思っている。マッシュだって、表情を曇らせながらも「大丈夫です、きつと」と、信じているから。

裏切ったのも理由があるかもしれないという可能性が出てきたの

なら、藤丸立香はそれを信じる。

「言峰さんは、何か事情があつて敵側に回つたんじゃないかな……」

自分の知る言峰さんはずっとずっと、カルデアのために尽くしてきたようだと、藤丸立香は思い返した。

朝早くから夜遅くまで働いていた。

彼がいたからこそカルデアで安心できた日々があつた。彼はカルデアに住む職員全員の心を守ってくれた。温かな毎日を守ってくれていた。

彼と接していた日常は本当に尊いものだった。

ずっとずっと、こういう毎日が続くのだと信じていた。言峰さんは大丈夫だと、思い込んでいた。

それがただ遊びのために、嘲笑うために裏切つただなんて藤丸立香は信じたくない。

「このまま前へ進んでいけばきつと、言峰さんに会えるから。その時になつたらきつと……事情が分かると思う。そうしたら私は——」

だから今は、立ち止まらない。

ただ前を見て進んでいく。そう藤丸は決めた。

その決意を、マシユや皆は尊重してくれた。

マシユも藤丸と同じ気持ちで前へ進もうと決意した。

だから彼女たちは負けないのだ。言峰の事を信じているから。

いつか会える、その時まで。

第十一話 ギャグで終わるのはこの話だけ

言峰は、己自身に起きている影響というものをちゃんと理解していた。

最初はもう少し人の事をきちんと考えていたはずだった。裏切り行為についても理解していた。何があるうとも最終的に藤丸立香の味方としてゲーティアを裏切ろうと思っている。それは今も同じく。

——しかし、状況によってはそれがひっくり返るかもしれない。そう言峰は自分自身の揺れ動かされる感情の答えを見出していた。

これはある意味、愉悦なるもの。

他人が絶望することが、ではない。

どのような状況であれ苦悩し絶望の果てにどう足掻くのか、それに興味があった。

藤丸立香がどのような危機的状況で立ち向かえるのか見てみたいという気持ちもあった。しかし計画通りにうまくいかなくていいという気持ちもある。

もしもこのまま藤丸立香を裏切ったままならば、人理は確実に崩壊するだろうから。

しかしどうにも本能とやらを止める術はない。

ならばもういつそのこと楽しめばいい。どのような状況であれ、流されるがままに生きようと決めたのだ。

それが言峰の身体に憑依した『彼』自身が見出した答えであった。だから今、彼は己の欲求に突き動かされるままやるべきことをやっていた。

ウルクの服を身にまとい、上半身裸で汗を流しながらも——。

「ああ、ようやくか……この時を待っていた！」

香辛料は何処から調達するべきかと悩んだ時もあった。山菜などいくつか探して、見つからない時もあった。どこぞの英霊が「菓子でないならいらぬ！」と放り投げたものを食べ比べ、味に近いものを探す日々。

それ以外にも以前、ギルガメッシュによって召喚された言峰の苗字を一時期使っていたルーラーなる男、天草四郎が言峰の働いている場面に出くわし二度見どころか三度見されたこともあった。

その時の言峰はレンガ造りを真面目に行っており、いい汗をかいていたのだが、天草四郎はそんな言峰を見てドン引きしてるようだった。

しかし言峰は彼の反応を見てよくわかった。

ウルク市街でたまに監視されているような視線を感じていたのだが、それは監視者による独断かそれともギルガメッシュ王による極秘の任務だったのか。

監視者についてはとにかく、天草四郎は知らなかったらしい。

天草四郎から「何故ここに？」と若干警戒されつつ問いかけられたので、言峰は流石に正直に話せるわけではないとつさに「麻婆を作るために来た」と答えてやった。天草四郎は引き攣った笑みを浮かべた。

その後いくつか彼と会話をして——そうして、麻婆豆腐を作るためのきっかけを知った。

ギルガメッシュ王はこの世のありとあらゆる宝を手に入れたゴージャスなるもの。ならば、言峰が知るあの麻婆を作るための材料も持っているのではないかと。

困難な道のりだった。

言峰は一時期死ぬ思いをした。しかしある理由で冥府に逝きかけたギルガメッシュ王と話をすることが出来たおかげで材料が手に入ったのだ。

それが今、ここにある。

言峰はごくりと喉を鳴らした。

そのピリツとした辛い匂いというのは、空腹へと導くスパイスとなった。

目に痛いと思えるほどの真っ赤なもの。白色の豆腐が赤色の沼に沈む。その中にいくつかの肉が注がれ、ドロドロに混ざっていく。

あまりの刺激物に悲鳴を上げたのは、空腹でよく菓子をねだる鬼子だった。

顔を青ざめて逃げ出したのは言峰が麻婆制作時に興味本位で近づいて来たウルクの民も同じく。

ギルガメッシュ王に報告するつもりらしいが——言峰のサーヴァントとしての聴力が良すぎるからだろうか。ウルク市街にすら聞こえてくるほどの笑い声が響き、やがて消えた。それに悲鳴を上げる誰かの声も聞こえた。

周りがどのような状況であれ、今の言峰はこれを食らうしかない。

言峰にとって食事とは作業の一つだった。

栄養を身体に取り込むため。サーヴァントにとっては娯楽のため。

それをきちんと理解していなかったから、言峰は食事をまともにやるつもりはなかった。

ただ、麻婆だけは別なのだ。

麻婆は言峰綺礼にとって心を動かされたものの一つ。

そして目の前にあるのは必死に動いた結果手に入ったもの。それを食べないわけにはいかない。

言峰は口を開けて——。

「おいお前、いったい何を食べようとしているんだ」

聞こえてきた声に、再び口を閉ざした。

視線が温かな麻婆からとある温かな緑へ向けられる。

冷たい声色。その中に浮かぶ困惑、懐疑、ドン引きしたような感情。それらを見た瞬間、反射的に心の中で笑いながらも、言峰はキングウの方を見た。

「見て分らないか？ ——これは麻婆の、試作品だ。いや、完成品に近い代物だな」

「いや、見て分かるわけないだろ。何言ってるんだお前は……」

再び呆れたような目が言峰に襲い掛かる。

しかし彼はまじめにやった。真面目に心を動かされたものを作ろうとした。情熱的に、真剣に、魂の逸品を作り上げたのだから。

そんな言峰の感情なんて知らぬとばかりにキングウは鼻で笑う。

「母さんが呼んでる。来い」

キングウは言峰に伝えたあと、すぐに彼から離れて何処かへ向かっていった。

きっと早く来いと言いたいのだろう。それはキングウが言外に伝えてくるプレッシャーで理解している。

しかし、と——捨てるわけにはいかないからと、言峰は真剣に麻婆を食べてから行くことにしたのだった。

第十二話 沈み歪み、そうして彼は

『行かないで、いかないで——』

聞こえてきた声に言峰は我に返った。

ふと気づけば周りは闇の中。何もかもが歪み、認識すらも全て薄暗く憎しみすら抱く悪へと改造されていくようなもの。

何処かで見たことのあるような——でも何かが違う泥のようなもの。それに浸かっている感覚だった。

薄寒い場所だった。

吐き気がするような何かに、言峰は襲われ続けていた。

言峰としてではない、ラスプーチンのサーヴァントとしてのエネルギーを食らいつくそうとしているのだろう。

身体が酷く軋む。何かに内側から食らいつくされていく感覚に襲われる。

自分が自分じゃなくなる恐怖にも似た何かが這い上がってきたと、錯覚した。

激痛に襲われた。

魂を歪ませるような何かに、自分が侵されていくと理解する。

何故こうなったのか。言峰はちゃんと理解していた。

口を開けたら周りがある何かが入り込んできて内側へ侵入するだろう。もう今更な気もしたが、気分が悪くなることだけは避けたいので言峰は決して口を開かない。

ただ、キングウに呼び出されたから来た場所で、突然突き落とされたのだ。

蛇の巣穴のような場所。抵抗する間もなかった。

いや、言峰が本気を出せば抵抗しキングウや『彼女』から逃げ、生き延びることぐらいは出来る。しかし言峰はキングウがどう動くのかを見てみたい衝動に駆られ、無抵抗のままにいることに決めてし

まった。

それが、どういう最後になるのかも知らずに。

言峰によってラスプーチンのサーヴァントとして召喚された『彼自身』は、本能である感情に振り回されて動くのは程々にした方がいいと理解した。むしろここまでやってきてよく生きてきた方かと思っ
ている。

このまま消滅したら『自分』はどうなるだろうか。消えてしまうのか、それとも中身が異なるラスプーチンとして座に登録される——
—のは、あり得ないかと、彼は思考を回す。

さて、このまま消えてしまう方が早い気もするが、まだ言峰は抵抗する力があつた。

ここから先は、どうするべきかと彼は悩む。

『いかないで——』

ごぼり……と、言峰は何かを吐き出した。

口を閉ざし続けていても、内側に侵入する何かを止めることはできない。

これはきつと、人をラフムへと変えてしまうもの。

サーヴァントをオルタへと墮としていく極悪なるものだろう。

もう何時間、何日、何か月経つたのだろうか。

永劫ともいえる時間を繰り返してきた気がする。己自身が屈するまで、心が泥に侵され全てがアレの配下となるために攻撃され続けている。

『抵抗しないで』

愛おしいというような声は、明らかに言峰に向けて放たれている。

それを受け止めるつもりはない言峰は、ただどうして自分はこのままここに居るのだろうかと首を傾けた。

死ぬときは一瞬。後悔はなかった。己を殺すために動いたキン

グウにも、恨みなんてものはない。

これは己の油断が招いた事態なのだから、このまま消滅してもそれは自分に問題があっただけでとりあえず麻婆は食べれたのだし、愉悦するため裏切ろうと思っていたがまあ仕方なしと受け入れるつもりだったのだ。

その時の状況に、ただ流されるように。

エネルギーとして消耗されるのなら、それもまた運命というべきものと許容した。

しかし何故か、言峰はそれらに侵し尽くされても、襲われ続けてもなお意識はそのままだった。

痛みはある。違和感も確かに存在する。

それなのに、どうして自分は消滅しないのかと――。

(……ああ、そういえばそうだったな)

言峰は嗤う。

彼の中には、サーヴァントとしてのラスプーチン。そしてその依り代たる言峰綺礼がいる。

己の中に彼らがいる限りというか、一番の問題は言峰綺礼だが、あの男が自分を生かし続けているようなものかと理解したのだ。

彼は言峰綺礼であり、ラスプーチンであり、また『彼自身』であった。それを言峰は理解していた。

だから自分はオルタにはならない。

彼の中に眠る言峰綺礼がそれ等の毒を飲み干すように、抵抗し続けるのだ。

――まだ、やるべきことが残されているぞと言うかのように。

だから言峰は泣き続ける誰かの声に耳を貸さずに動くことに決めた。

突き落とされた場所から這い上がることを選んだ。

どのくらいの時間がかかってもいいと、彼は己の力が尽きるまでや

るべきことを成そうとする。

「……はぁ」

這い上がってきた先で、顔についた泥を拭い捨てた。
そうして周りを見て——目を見開いた。

「@q;.@q」

「uyq@6j5f」

そこにいたのは、ラフムの群れだった。

第十三話 カルデアの刺客

これは、藤丸立香が言峰と対峙する前の話。

言峰が泥に飲み込まれたあと。這い上がってくるより過去——

。マリーリンから言えば、プロローグとも呼ぶべき状況下にあった。

「ふーん……カルデア、ねえ？　じゃあなに、アンタたちもあいつと同じくウルクを滅ぼしに来たとかそういうことなの？」
「えっ？」

——事の発端はウルクにレイシフトした後のこと。

その時代は、ほとんど詰んでいると言っている状況らしい。いや、ギルガメッシュ王の采配によってなんとかまだ滅んでいない状況なだけ、ともいえるだろう。そう藤丸立香は認識している。

何が起きたのかと言えば、最悪なことだった。

それを知ることが出来たのは、ウルクにレイシフトした直後。突然天空から落ちてきたような女神、イシユタルと少しだけ会話をしてから分かったこと。

イシユタルは何か用事でもあつて急いでいるのか、それとも探し物でもあつたのかあまり藤丸立香達に興味を抱かなかつたようだが、とある言葉を聞いてその意識が変わった。

カルデアと聞いて、イシユタルは顔をしかめていた。

無反応から、興味の対象——そうして、敵対反応ともいえる何かに切り替わる。

そんな彼女の反応に困惑する藤丸達だったが、急に攻撃される可能性を感じ取ったマッシュにより盾を装備したまま構えた状態で会話をしようと試みる。

ウルクを滅ぼしに来たと言われたら、それは違うと断言できるの

だ。——だって藤丸達は人理を救済するために行動している最中。つまり国を滅ぼそうとする側はいつだって敵対していたソロモン——レフ達によるものだった。

彼らは国を救うために動く。それがカルデアの現状。
国を滅ぼすためにレイシフトしたわけじゃないのだから。

「わ、私達はウルクを滅ぼしに来たわけじゃありません!」

「はい、先輩の言う通り私たちはこのウルクの時代における特異点を修正するため、ギルガメッシュ王はウルクを収める英雄王であるなら、私達と敵対するはずが——」

「カルデアの者っていうなら、私にとって味方だなんていえないってだけよ——あいつと仲間だっていうならね」

「……あの、あいつって誰ですか?」

藤丸立香の問いかけに、イシュタルは答えない。

ただ鼻を鳴らして「これでも忙しいの。アンタたちに構ってられる暇なんてないわ」とどこかへ去っていく。藤丸達が止めようとしても彼女は反応しない。

あいつって言われて思い至ったのは、とある男性だった。

でもそんなわけがない。そう藤丸立香は否定する。否定して希望を持つとする。

とにかく話をしなければと上を見上げたが、女神はもう空の彼方に消えていた。

「……行っちゃいました」

「うん。何だったんだろうね。マッシュ」

「はい。……ここに、カルデアのことを知っている人がいるのでしようか?」

「ちよつと違うよ。カルデアの関係者がこのウルクにやってきているんだ。君たちより先にね」

不意に背後から話しかけてくる声が聞こえたので藤丸達は振り返った。

そこにいたのは中性的な人。緑色の綺麗な髪をロングヘアにした、見知らぬ生き物。

人間と全く同じ姿をしているけれど、何処か人とは違う雰囲気を感じる。

「あの……貴女は一体……」

「まずはここから離れよう。話はそこで……ここは獣が多い。安全とは呼べないからね」

名前は言わずに「こつちだよ」とどこかへ案内する。それに藤丸はマシユと一緒に顔を見合わせた。

「畏だろうか。それとも本当に安全を配慮してのことだろうか。」

「……どうしますか、先輩」

「うん、ここに居ても何も分からないし……ついていこう。それにあの人はカルデアの関係者について何か知ってるかもしれないから……」

「はい！ 了解しました、マスター！」

藤丸達は緑色の髪をした人についていくことに決めた。

このウルクが今までの特異点とは違い、最悪な方向へ向かっているとも知らずに――。

第十四話 事の発端

まさに疾風怒濤のごとくというべきか。藤丸達は流れるようにエルキドゥと呼ばれた人からマーリンに助け出され、ウルクへと向かうことになった。

マーリンと名乗った男がフォウにぶっ飛ばされた一面もあったし、アナと呼ばれた少女がマーリンの事を冷めた目で見ていた場面もあった。けれどそれは、まだほのぼのとしたマシな方だったらしい。彼らは話す。

ウルクで何があったのを。

「まあ、何かあったと言っても簡単な話さ。麻婆教が誕生してしまつてね」

「なんて？」

カルデアから来た関係者。麻婆を愛する男が麻婆をウルクにて開発した。しかしそれは予想外の方向へ行ってしまったのだ。

裏切りそうな敵対勢力の匂いがするサーヴァントに対し、放っておけと言ったギルガメッシュ王。しかし予想外の方向に進んだ彼にギルガメッシュ王は爆笑し死にかけた。冥府の谷に落ちそうになったけれどすぐ這い上がってきたらしい。

ウルクの王すらも間接的に殺しかけた麻婆は、それだけで終わらなかった。

なんせ麻婆をこの時代に再現するというのは至極困難なこと。それをやり切った男は偶然——麻婆の辛み成分としてあるモノに目を付けた。

それこそが神秘。

毒をも満たすもの。依存性が高く、全ての元凶となったもの。

「やってはいけない薬的なやつ？」

「いや、そういう君たちの時代にとってタブーな薬は使われてないよ。使われたのは複数……ギルガメッシュ王の持つ宝具の中に眠ってた食材と、イシユタルからかっぱらってきたものを料理を作る道具として使い、今はもういない忍び系のサーヴァントから香辛料を手に入れた。そしてその中にある刺激物も入れてしまったんだよ彼は……」

「あの、ちよつと待って。その麻婆を作ったサーヴァントつてもしかして……」

「察してくれたようだし一言でまとめよう！ 煌びやかな食材、豪華絢爛なキッチン道具！ 素敵な香辛料もいっぱい！ けれど神父系サーヴァントは間違えて余計な物も入れちゃった！ それは——」

何を入れたのかを言う前に、管制室で様子を見ていたらしいロマニ・アーキマンの声が響く。

『ちよつと待って導入がなんだか昔懐かしパワーパフ的なあれなんだけど!?! マーリンってそう言うの見るのかい!?!』

「マジ☆マリにも書いてあることだからね!」

『マジ☆マリにそんなこと書いてあるわけないだろう嘘つけ——
——って思ったらあつた!?! はあ!?!』

「ツツコミどころはそこではないと思います、ドクター! あと少し落ち着いてください!」

何だかギャグっぽくなっていくテンションにマシユは目を白黒させる。

そんな後輩の様子を見た藤丸は小さく溜息を吐いて、そうしてマーリンを見た。

マーリンの雰囲気が一変する。

いや、ずっと楽しんでるような感じは変わらずだけれど、藤丸立香自身の事を期待しているように見えた。

「……もう単刀直入に言うね。カルデアから来た関係者って言峰さんでしょ」

「ああ、あたりだよ」

満足げに笑った彼に、藤丸は目を伏せた。

本当に言峰さんがここにいる。

カルデアから逃げて、ここに来たということか。いやでもキャスターたちの話だと強制的にレイシフトされたようなものっていつてたしな、と。藤丸立香は考える。

藤丸はまだ希望を持っていた。

だってまだ、言峰さんと出会っていないから。まだ話もまともにしていない。自分が立ち止まりそうになった頃の、あの言峰さんのおかげでどうにかできた全てを——希望の光を忘れたくはないからと。

もしも人理を滅ぼす側だというのなら、自分は止めなくてはならないということも藤丸立香は理解していた。覚悟していた。

だってそれが、彼に対する恩返しになると思ってもいるから。

カルデア職員全員の心をきちんと救ってくれた言峰さんだからと

「ねえ教えて。……言峰さんは本当にウルクを滅ぼしに来たの？ 言

峰さんは……最初から私たちを裏切ってたの？」

「せ、せんぱい……」

不安そうな顔をするマシユの背中を撫でた藤丸はマーリンを見た。彼はとても面白そうな顔でまだ見えぬウルクの方角へ顔を向ける。

「いや、それはどうかな？ 彼はどちらかというとうっかり属性の強

いサーヴァントだ。僕はうっかりなんて属性は持っていないけどね。

……心配しなくてもいい。彼は裏切らないさ。なんてったって花の魔術師マーリンお兄さんは彼の性根をバツチリ理解しているからね

——そう、僕と同じタイプだね！」

ドヤ顔のマーリンに対し、アナはゴミでも見るかのような目になり鼻で笑ったのだった。

第十五話 麻婆教

ギルガメツシュ王に会う前にと、マーリンに連れてこられたのはウルク市街にある場所。

そこにあつたのは異様な光景。そして漂う刺激臭だった。

「待って、ウルクなのに麻婆専門店が出来てるんだけど!？」

「先輩すごいです。行列が出来るほど大人気みたいです! あそこまで並んでますよ!」

『いやウルクに麻婆専門店とかあり得ないから!!』

ロマニのツツコミが市街に響くほどその光景はあまりにひどいものだった。

——いや、チエイテの上にピラミッドが乗ってるようなハロウィンよりマシだろうか。そう藤丸立香は死んだ目をしながらも考える。

それは、ウルク市街の一角にある雰囲気異なるお店。

花屋やレンガ屋といった古風な感じじゃない。和風というべきか、中華風ともいうべきか。藤丸立香は以前イリヤスフィールが言峰に向かって「ラーメン屋のおじさん!」と叫んでいた言葉をふと思い出した。

つまりこれはラーメン屋……に似た、麻婆専門店ということか。

「ねえなんかもうこれだけで特異点になってない? ウルク大丈夫?」

「あははははっ! 面白いことを言うね。大丈夫だよギルガメツシュ王がそれを許すはずがない。それにこれはある意味嫌がらせの一環でもあるからね」

「嫌がらせっ?」

マーリンが言うには、事の発端は麻婆を布教しようとする言峰の動きにギルガメツシュ王が反応したことだった。

美味しい麻婆を食べて、その麻婆の味を知るウルクの民が日々麻婆のために生きるとかいう状態になったらしい。そこから女神が襲撃して誘拐みたいなことが起きて「麻婆がないならウルクに帰る！」とかいう騒ぎを起こして大変なことになったらしい。

ただの食べ物。女神のように敬うわけではない。麻婆教とか言っているけれど、つまり麻婆布教を略したもの。麻婆信仰はまだ、起きていない。

ただ美味しいものを食べるために汗を流して毎日働く、健康的に過ごすための娯楽に麻婆が入り込んだ。それだけだ。

女神がウルクを襲撃しても「麻婆を食うために死ぬわけにはいかない！」とかいう面白状況に発展し始めたのでギルガメツシュ王はまた笑い死にしそうになったらしいが……。

「——というわけさ。ああ安心してくれ。今作られてる麻婆はやばいものが入ってるわけじゃないからね」

「……あのさ、ずっと思ってたんだけどやばいものって何？ ケミカルなんちゃらじゃないでしょ？」

「聖杯さ」

「せい……はっ？」

「そう、聖杯だよ。ウルクのものでもなく、敵側が所有するものでもない。このウルク市街に彼が入り込んでから監視していたんだけどね、もう本当にいつの間にか持っていたと言っているいいモノだったんだよ」

楽しそうに笑ったマーリンとは違い、アナは疲れたような顔で溜息を吐く。

目の前に麻婆専門店があるせいでやけにいい匂いがしてお腹がすく。そういった状況すらマーリンは楽しんでるのだろう。

そう藤丸は彼をちよつとした愉快犯の気質があるなど評価した。

マーリンは微笑みながらも話を紡ぐ。

「彼はごく自然に聖杯を持っていた。でもそれを彼は実感していないようだった。イシユタルからかつぱらってきた物の一つと思っただろうね。それを器にした麻婆を彼は食べたんだ」

『ああ、これで納得がいったよ。ラスプーチンがカルデアから消えたあの日から今まで……魔力を何処から供給していたのかわかっているね』

「うん。ダ・ヴィンチちゃんの言う通りだ……。それと聖杯は何処から拾ったのかわかっているのが問題なんだけど……多分、ソロモンだよかね？」

マーリンは満足げに笑いながら頷いた。

ただ少しだけ様子がおかしく、何かを隠しているのも分かった。

「マーリン？」

「彼についてはまた……彼と直接会った時に話そうじゃないか」「う、うん？」

藤丸立香とマシユはそれぞれ顔を見合わせる。

言峰に対することならばと問い詰めようとした瞬間だった。ダ・ヴィンチちゃんの笑い声が響いてきたのだ。——ちなみにロマニはマジ☆マリの一件で頭を抱えてしまったらしい。ちゃんと管制室にいるようだがしばらく放っておくとのことだった。

『なんかもうあれだね。ラスプーチンがどう動くのか見たいがために人理を崩壊させた元凶がわざと彼におもちやを与えて放流しているような気になってきたよー！』

「ダ・ヴィンチちゃんなんかそれ違うと思う。……お、思いたい」「先輩？」

「だってさ分かるでしょマシユなら！ 私の知ってる言峰さんはそんな愉快な人じゃないもん！」

『何言ってるのさ立香ちゃん。私が言うのもなんだけど、立香ちゃんも重い感情を抱いてるよね。彼に』

「重くもないし、軽くもないよ。程々です」

「先輩……私も同じです！ 私もこの状況で言峰さんにお会いしたら何を言えいいのか分からなくなりますから……!!」

「だよねマシユ！ 私たちはおかしくないよね！」

言峰さんが敵なら倒して仲間にする。危害を加えるなら止める。そういう覚悟は決まったけれど、いざ目の前でそれが起きたら動けるのかという不安が藤丸にはあった。

それと言峰に依存していた期間があったためか、彼に対する評価に物申したい気分にもなってきたのだ。

そんな騒ぎに麻婆専門店の列を並ぶウルク市民が怪訝そうな顔で見えてきた。

真横で見ていたアナすらも、マーリンを見ていたあのごみのような目を藤丸立香に向けるぐらいには。

「カルデアの人たちに任せて大丈夫なんでしょうか……」

アナの声に藤丸はハッと我に返ってマーリン達を見つめる。

「あの、言峰さんは!? 聖杯を器にして飲んだって言ってたけど、やばいものを作ったってことだよな？ それで……ええと、彼は一体何処にいるの!?!」

「落ち着いてください先輩！」

「ああ、花の香りでも感じて落ち着きなさい。それに彼はここにはいないよ」

「……いない?」

まさかまた、ソロモンに強制的にどこかへ——と、藤丸は顔を青ざめた。

あんなにもカオスな状況を作り上げた言峰だというのに、そんな彼を心配する藤丸に対し、彼女を観察していたマーリンは「これは重症だなあ」と笑ったのだった。

第十六話 その店主、コトミネ

普通だつたらこのままウルクの中央。ギルガメツシュ王がいる方へ向かうはずだと藤丸達は思っていた。

しかしマーリンは曖昧な態度で「まあまあ、お腹は空いてないかい？」と行列に並ぶことになり、あつという間に店内に。

その内部は和風と中華風が絶妙な具合に作り上げられたデザインとなっていた。

藤丸は周りをキョロキョロと見つめる。何処にでもありそうな一昔前のラーメン屋に似てるかもしれないと思ったのだ。

まるで、藤丸がほんの小さな子供の頃に行ったような場所。ちよつとだけ油臭くて、そしてちよつぴり涙が出そうな唐辛子の香りが店内に漂っている。

お客は皆麻婆ばかりを注文しているようだ。「麻婆をくれ!」「私もそれを!」「辛い、お代わり!」「この辛さ、この刺激! 涙が出るほど鼻にツンと来る味! くうく! 生きてるって感じがするなあ!」とお祭り騒ぎのように盛り上がっている。

藤丸達がいる場所はカウンター席ではなく、店内の奥にあるテーブル席。四つの椅子が置いてあるそこに座り、藤丸の隣にマシユ、その正面にマーリン。そしてマーリンの横——には誰も座らず、何故か椅子を斜めにずらしマシユの隣に移動したアナがそこに座る。

マーリンは傷ついた様子もなく、楽しそうに「アナは恥ずかしがり屋だからね、まあこれぐらいは可愛い範囲だよ!」と言っているのを見たフォウに飛び蹴りされて椅子ごと後ろに倒れる珍事も起きた。

そうして少しだけ待っていると、お冷を持った店員——ならぬ、天草四郎。

「ああ、カルデアのマスターですか。何にします? 麻婆ですか。それとも麻婆ですか?」

「あ、天草さんそれは実質一択なのでは!？」

「どうか何で天草がお店にいるの!? 言峰さんは……いや、いな
いって分かってるけど……」

「先輩……」

表情を曇らせた藤丸の背中をマシユが優しく撫でる。

それにマーリンが何故か安心するように微笑んでいる。心配してくれているのか……と思っただけ、フォウがジト目で猪が突進してくる前に見せるような動きをするのでこれは良くない方の微笑だと理解した。

とりあえずマーリンについては放っておいて、今は天草だと彼を見つめる。

彼は何故か白Tシャツに長ズボンで腰にエプロンを巻いている。額には汗を流していた。Tシャツには『店長代理(不本意)』と日本語で達筆に書かれている。もしかしてこれ天草が作ったんだろうか。そう藤丸は思いながらも彼に向かって話しかけた。

「ええと、天草はなんでここで働いてるの?」

「……いろいろと事情があります。ああ、それより麻婆を食べますよね。四人前」

「私はいらない」

「アナさんは無しと……では杏仁豆腐でもいいかですか? まあこのウルクでは本場の様な味は出せませんが……」

「いい、それにする」

「ではアナさんには杏仁豆腐。他三人には麻婆豆腐ですね」

「僕は甘口で頼むよ! 流石に一口食べただけで意識が飛ぶような激辛はちよつとね——」

「激辛麻婆三つと杏仁豆腐一つですね!」

そうして、天草は店の裏手へ入っていく。なんというか、彼に向かって何かを言う前にいつの間にか麻婆を頼まれている事実藤丸

はたじろいでしまっていた。

マシユの方を見ると、彼女は藤丸と目が合い——何故か覚悟を決めたように頷いてくる。

「頑張りましょう先輩。ウルクの麻婆豆腐……つまり言峰さんの作るあの麻婆豆腐のお味ということになります」

「ハッ!? 言峰さんが作る麻婆豆腐……よし、美味しくいっぱい食べようね。マシユ!」

「は、はい! 例え味覚が壊れようとも全力で挑ませていただきます!!」

ガッツポーズを決めたマシユと、それに合わせるように同じポーズをとり笑った藤丸。

そうして和んだ後、藤丸はマーリンを見た。

「……それで、天草と顔合わせをするためにここに来たの?」

「ああそうだね。彼はこのウルクで——ギルガメツシュ王の奪還を行うための計画を立てている最中なんだ。そこにカルデアの君たちも巻き込みたい」

「はい?」

「えっ……あの、今聞き捨てならない言葉が聞こえたように思うんですが。ギルガメツシュ王は……その、何処かに捕まっているのでしょうか?」

「ああそうだよ。ちよつと……死にかけて余波でね。流石に四度目はうまくいかなかったらしい……王は今、冥府に囚われているんだ。もちろんギルガメツシュ王は一度死にかけて時にこうなるかもしれないと予期してか、自らが冥府に囚われた時用に準備をしていたから安心してほしい」

「いやいや安心できないから!!」

「は、早く迎えに行った方がいいのでは!? ここで麻婆を食べているよりも——」

「うっ、でもマシユ……言峰さんの料理……」

「はっ!? そうです……ですが、どうしましょう……」

「なーに、心配はいらないさ。それより麻婆に慣れておいた方がいい
と思ってね」

「……麻婆に、慣れる?」

意味が分からないという藤丸に、マーリンはただ笑うだけ。

アナの方を見ると、彼女は疲れたように溜息を吐いただけだった。

第十七話 ギルガメツシユは上機嫌である

その女神は苦勞していた。

自らはウルクのためにと日々動いており、全てはウルクに住まう民に絶望を感じさせないよう安らかな眠りにつかせるため。

しかしそれは、ある日を境に全てがひっくり返る。

三度も死にかけたギルガメツシユはそれを知っている。女神がたった一つの麻婆によってウルク地下にいたガルラ霊が異様な汚染を受けて赤く染まったことを。ほのかに麻婆の匂いがすること。

普通の料理だったらそんなことはなかったが、聖杯を受けた麻婆による影響なのだからそれは計り知れない。

ギルガメツシユが笑うのも仕方がないこと。何度も笑い死にかけてシドウリに呆れたような顔で小さく溜息を吐かれても何も思うことはない。

あの男は偽物であるが、そうではない。本物よりもある意味厄介な男であった。

なんせあの言峰綺礼は、無自覚に場を荒らす介入者。

マーリンから見れば珍妙な生き物。物語へ意図的に介入するメアリー・スーであればやりようもあったが、彼はそういう輩ではなかった。

ただ真剣に、麻婆を食べたいと願っていた。

ただそれだけでここまで事態が悪化したのだ。

いつの間にか愉快から外れて、敵を裏切るか味方を裏切るか、そういう大事なことを忘れる馬鹿者であった。

笑い死にかけるのもしかたがないことだろう。

冥府の女神は麻婆に翻弄され、とある別の女神は麻婆に困惑しつつも受け入れ始め、元凶に与する女神は次第に染まってきている。

イシユタルなんて麻婆を作るための料理器具をエビフ山からかっぱらってきた物を加工して作られたのだからある意味被害者だ。ギ

ルガメツシユにとっては愉悦以外の何物でもないが。

あの男、よもや女神特攻でも入っているのではないだろうか。

スキル麻婆で女神が麻婆汚染するような感じのものかもしれない。

そう馬鹿な冗談を言えるぐらいにはギルガメツシユは上機嫌であつた。

何故ギルガメツシユが冥府にいるのか。

なぜこうなったのかと言えば、まあそれは敵のせい。麻婆の元凶たるあの男を取り込んでしまったが故の被害。しかし敵も甚大な被害を被っているのだから自業自得なのだが……。

「もう、なんでこうなったのだわ!? やっぱ私が……わたしが、ちゃんと見張つてなかったからなのかしら……!?」

「フハハハハハ!!」

「笑つてないで手伝いなさい!」

「断る! 何故我が冥府の雑用をする必要があるというのだ。貴様はウルクを攻め入ろうとした女神。我が手を動かす道理もないわたわけ! フハハハハハ!!」

「もう! ウルクが麻婆まみれになつても知らないのだわ!!」

「たわけ! 我がウルクを舐めるな。あれは一過性に過ぎん。このよ
うな事態だからこそ許容できる範囲のもの。あ奴らはそれに翻弄されウルクは力を得ているがな! ……ふ、フハハハハハ!! 我が見ていたアレよりも酷く、麻婆一つでここまで未来が変わるとは、もはや笑うしかないではないか!!」

「笑うなあ!!」

女神は涙目になりながらもギルガメツシユに向かって怒鳴る。

しかしギルガメツシユはそれを愉悦しながら眺めていた。

通常の未来ではそんなことはあり得ない。

何が起きるのかある程度分かっているからこそ、こんなカオスな事態はあり得ない。

しかし、言峰という男が介入してから——何もかも、まあ良い

意味でも悪い意味でも変わってきてはいるのだ。可哀そうなのは敵側だとギルガメツシユは考える。

冥府すらも多少は赤くなつたところで色合いが鮮やかになつたのだから良い方ではないか。哀れではあるがなと笑う。あのエビフ山でもこんな事態になつていたならばとギルガメツシユは笑う。嗤う。

もはや上機嫌王でしかないぐらいには、面白い事態にしてくれたものだと理解する。

ウルクは危機に瀕しているが、己自身が予想するほどではない。

おそらくは、あの男が来る以前は確定していたであろう未来よりマシになるはずだと理解している。だからギルガメツシユは天草に多少の無理を言った。やるべきことがあつたがそれはそのままにしてやつたのだ。

天草には、言峰を殺す役割を持たせなくてはならない。

だからギルガメツシユは彼を残した。

ああしかし——と、元凶に関していくらか文句を付けてやりたところだと彼は嗤う。あの言峰を食べようとするとは本当に何をしでかしてくれたのかと、多少は怒りを込み上げながらだが。

「アレは異様さを凝縮したような男だぞ。否、愉悦さを見出された男とも言うがな。——故に、奴らは失敗したのだ。あれを自由にさせこのウルクへ入らせたせいで麻婆まみれになつたともいえるがなあフハハハハ!!」

「うう……そんなの知らないわよお……」

ついでにあの麻婆の匂いしかしない残念な聖杯についても思うところがあつた。

もしもこのウルクであの言峰が消滅した場合、あの残念な聖杯を中身が本物の『言峰綺礼』が持つていく可能性もあると、ギルガメツシユは理解し懸念していたからである。

聖杯とはいえ、あの残念な聖杯を宝物庫に入れるのもな……と、ギルガメツシユは悩む。

まあそれは、これから先を乗り越えるために考えよう。

周りは太陽のない薄暗い世界。

ガルラ霊たちがうようよ彷徨う冥府そのもの。

しかしそこに一滴の麻婆が流れ込んだせいで汚染が始まった。

ガルラ霊はほのかに赤く、麻婆の匂いがする。

土は一部が麻婆に浸食されている。

もう何だこれと書いていても、麻婆としか言いようがない。

何故こうなったのかと言えば、言峰のせいであり彼を飲み込み食べようとした元凶のせいともいえる。

「あああもう！ どうでもいいから早くこの匂いをどうにかするのだわ！ こんな真つ赤に濡れた冥府なんて見たくないのに!!」

「フハハハハハハハハハ!!」

「笑うなあ!!」

笑い声は冥府に響く。

それは、天草が藤丸達を連れてやってくるまで続いたのだった――

第十八話 それは藤丸に必要な壁

冥府での問答。イシュタルとまだ友好的な関係になつてはいないはずだが、冥府へ降りる際に「あら、貴方たちもギルガメツシュを笑いに行くの？」と言いなながら楽しそうについてきたのが始まりだった。

いくつかのギャグのようなシーンを乗り越え、一行が目にしたのは王座のような椅子に座り上機嫌なギルガメツシュ王と、地面に両膝をつき、泣きながら何かを訴えているイシュタルに似た誰か。

カルデアの藤丸達を見た瞬間、彼女は顔を真っ赤にし先ほどの醜態を恥じているようだった。照れ隠しに「ごほん、よくぞ冥府へ来たのだわ! ……ちよつと所々赤いし変な臭いもするけれど、貴方たちを歓迎します。そして早くこの事態を終わらせるために——まず、は貴方たちの力を試みましょう! やるのだわ!」という感じで無理やり戦闘をすることになった。

しかしというべきか、周囲に漂う麻婆臭があるせいかイシュタルに似た女神——エレシユキガルはこの冥府の惨状を恥じているのか徐々に体力が削られ、宝具も打てない巨大なガルラ霊状態になつて戦っていた。ちなみに周囲にいたガルラ霊はほのかに赤色をしていたのに対し、巨大なガルラ霊となったエレシユキガルは真っ白であった。彼女もまた影響を受けて赤色になつていたならきつとその状況を理解した時点で恥じて即死が入つていたことだろう。そう藤丸は考える。

——ちなみに余談だが、ギルガメツシュを笑いに来たイシュタルは冥府の惨状にドン引きしつつ、問答によつて彼女自身の身体が小さくなつていくことに対し恐怖を覚えたのか「ねえ私から麻婆の臭いなんてしてないわよね。麻婆に影響なんて……」、この金星の女神たる私がそんな……ねえちよつと、何でそんな目でそっぽ向くのよ。ねえ!」と叫んでいたこともあつた。

麻婆臭は周りにも漂っていたため、イシユタルから発しているのか分からない状態だったと藤丸は思い返す。

「ふん。来るのが遅い！」

「何言ってるんですか。これでもあなたの命令に従って麻婆をばらまいていたんですよ」

「まあまあ、とりあえず無事でよかったですよ」

「ちつとも無事なんかじゃないのかわ！ どうしてくれるのよこの冥府！」

泣き叫ぶエレシユキガルに同情した藤丸は彼女に寄り添いいろいろと話を聞くことにした。冥府の復興に出来るだけ協力もしようとして約束すらししてしまった。

そうしていくうちにエレシユキガルは藤丸に対する心が開かれたのか、ほのかに頬を赤く染めながらも嬉しそうに笑って「しようがないから協力してあげるのかわ。あの麻婆の元凶をどうにかしないといけないもの」と言ってくれたのだった。

その様子を見ていたギルガメツシユは目を細める。

「おい、雑種」

「え、私ですか？」

「そうだ。……貴様、言峰に執着しているようだな？」

「執着とは違うような気が——」

「貴様、本当に分かっているのか？ いや分かっているままここまで来たのだな。フハハハハハ!! 愚鈍さを笑ってやろう！」

「ええと、どういう……」

藤丸がマシユと顔を見合わせ、お互いに首を傾げる。

どういふことなんだろうかと藤丸はマシユ以外にも周りのサーヴァントたちを見た。

マーリンは楽しそうに。アナは冷めた目で。

天草は何を考えているのか分からないような微笑を浮かべて——
——そうして、イシユタルとエレシユキガルはギルガメツシユの笑い
声を不快に感じたのか眉をひそめていた。

ちなみにイシユタルの今の身体は小さいため、ギルガメツシユに近
づいたら吹っ飛んでしまいそうな儂さを感じる状態である。

ギルガメツシユは楽しそうに笑ったあと、真顔で藤丸を見た。

「このまま進めば貴様はこの先——あの言峰を殺すことになる
ぞ」

「……………えっ」

第十九話 ルチャマーボーの入り口

言峰を殺す、という内容を聞いた藤丸はずっと思い悩んでいた。

言峰が敵だというのならボッコボコに倒して自らのサーヴァントにすると決めていたのに、それは不可能だとギルガメッシュが言ったから。

ギルガメッシュは言う。あの言峰は藤丸立香のサーヴァントにはならぬと。

あの男は手遅れだと言っていた。カルデアにいた頃に藤丸のサーヴァントとして契約していたなら手は有っただろうが、今となっては夢の話。

このウルクに來た時点であの聖杯が発動した。

言峰の願いを聞いた。そうして出來たのが、麻婆だった。

言峰はもう死んだも同じだというのだ。そんなの信じたくないけれど、藤丸はギルガメッシュが嘘をついているようには思えなかった。

だからきつと、次に会う言峰さんは自分の知っている言峰さんじゃないんだと思えたのだ。

「死んじやった言峰さんは最後まで麻婆のために動いてたとか……ははっ……ほんと、わらえるよね……」

「先輩……元氣を出してください先輩。言峰さんは麻婆によってウルク……いえ、三女神同盟の一人たるエレシユキガルさんを倒したんです！ ですから、言峰さんは最後まで敵じゃなかった。それだけは救いだと……その……」

「うん。……うん、そうだよねマシユ。ありがとう。言峰さんにいっぱい伝えたいことがあるけれど、それはまた、会ったらにするよ。ウルクにはいないって言ってたけど……いつか会えるかもだから、王様

はその時に言峰さんを殺せって言うてたけど……今は思考を切り替えないとだよね！」

「は、はいー！」

両頬をバチンと強く叩いて気合いを入れ直した藤丸を見たマシユが、自分もと彼女も同じく自らの頬を叩く。

ギルガメツシユ王はシドゥリに連れていかれて仕事に追われている。

イシュタルはエレシユキガルの一件で麻婆臭くなった身体に湯浴みするとかなんとかでどこかへ行ってしまった。

天草は相変わらず麻婆屋の店主。マーリンはウルク市街の女性を口説き、アナとはある盲目のお婆ちゃんのことを手伝っている。

藤丸達も同じく、ギルガメツシユ王が戻ってきたからという記念でお祭りが行われたがそれに参加した後

そんなウルクに襲撃してきた女神がいた。

彼女はまず、天草が働いている麻婆屋に向かつて襲い掛かってきた。それを見た藤丸はすぐさま応戦。言峰が最後に残した店を潰されるわけにはいかないとマシユと共に戦った——が、彼女たちを凌駕するほどの強さ。その勢いはすさまじく店においてある天草が書いたであろう達筆の『麻婆』の木製看板は吹き飛ばされた。

そうして彼女は『麻婆』の看板を踏み潰し、藤丸を見る。

「貴方も麻婆の被害に遭ったのかしら？」

「被害って何？ それよりその足をどかしなさい。貴方が潰したそれは——言峰さんが最後に残した大事なものだよ!!」

藤丸の言葉に女神は目を細め悪そうな顔でニヤリと笑う。その歯はとてもギザギザとしていておっかない。

——ついでにだが、天草ももちろん応戦しているので藤丸が怒鳴った言葉に小さく「あれ僕が作って書いたんですがね」と言っていたが聞こえてはいなかった。

「あらあら、麻婆を作りだした元凶の事が大好きなんですネー？ ならしょうがないわ。……ここからちよつとはしたなく。肉体言語で語り合いマース!!」

「先輩！」

襲い掛かってきた彼女にマシユの盾で塞がれる。

その背後にアナが武器でもって攻撃するがあっけなく避けて、マシユとアナを同時に蹴り上げ吹き飛ばした。

「強い……！」

「うふふ、ルチャリブレに強さの限界なんてありません！ さあ、貴方を正気に戻してあげましょう！」

指をゴキゴキと鳴らし近づく女神が、藤丸に向かって手を伸ばす。

そんな彼女の魔の手から守るように——天草が前へ出た。

「女神というにはいささか乱暴ですが感謝します。これでようやく麻婆屋のスタッフから逃れられる！」

「ちよつと待って天草さん。その言い方はなんかおかしい。あの女神さんの敵なの味方なのどっちなの!？」

「何を言ってるんですかカルデアのマスター。僕はギルガメッシュ王に召喚されたサーヴァント。このウルクを害するのなら敵ですよ……ええ、ウルクを害するのなら、ですがね」

天草のその瞳は少しだけ、不穏な色を宿していた。

第二十話 ギャグはこれで終わらせたい

ケツアルコアトルとの戦いはあつという間に終わった。

なんせ彼女にとつてはこの麻婆戦線のような状況は大変不本意で、かつこのままでは本当に面倒なことになるらしいと理解しているから……らしい。そう藤丸は聞かされた。

その戦いの合間に出てきたジャガーマンは何故か鍋に入った麻婆を頭からかぶってぶっ飛んでいたが……。

マシユ達との勝負を終え、不穏な雰囲気为天草に藤丸が言及し「聖杯が欲しいだけですよ」という言葉にまあちよつとしたトラブルはあつたが、何とか乗り越えることが出来た。

終わったと同時に始まったのは、地獄のような状況だった。

レオニダス一世が戦いによつて消滅した。牛若丸がキングウによつて捕まったため生死不明。

そうして全てが悪い方向へと始まっていったように感じたのだ。

——泥が押し寄せる。

少しばかり赤いそれは、麻婆とは違う。人を変える凶悪な呪い。

人が玩具のように扱われる。

人と人を殺し合わせ、勝利しても殺されるだけ。カブトムシなどで虫相撲し遊ぶ時のように。純粋な子供が蝶々を掴み、羽を引きちぎるかのよう。

人は発狂し、笑つて全てを投げ出したものもいた。

それはある意味、ウルクにおいて精神的活力となった麻婆の事ですから何も考えられないほどに凶悪だった。

それらの化け物の中に、キングウはいなかった。

「qkdeu!qkdeu!」

「ggx@yw@3:@」

「j——@——4.je」

「3cyw@7?.4」

「agg@?.4」

空から見下ろしてみたその景色はあまりにひどいものばかり。
でもそれよりも気になるものがあった。

泥の中から出てきたもの。
逞しそうな腕が泥から這い上がる。

「まさか——」

ラフムと呼ばれた化け物がたくさんいる中。

その泥から出てきたのは——男だった。

泥によって溶けたのか服を着ていない全裸の男。

その身体は筋肉質でとても屈強なもの。ラフムが一体彼にちよつかい出そうとして腕を伸ばしたが男が一撃を与え、消滅させた。

それにどよめくラフム。

しかし何かに気づいたのか——ラフムたちは何もしない。

まるで彼が王様かと思うように、何もする様子がない。つまりラフムにとっては味方のような存在なのだろう。そんな光景を見て、藤丸は視界が歪んだ。

「う、あ……」

藤丸立香は思わず涙を流す。

これが王様の言っていた今なのだ、気づいてしまった。

自分がやらなくてはならない運命はここなのだ、理解してしまつたのだ。

「ことみねさん……!」

あの彼こそカルデアにいた言峰さんそのもの。

ラフムたちが集う。彼の手足のように動く。

彼こそがラフムの王なのだろう。

つまりウルクにとっては言峰さんこそが、敵なのだろう。

藤丸は察したのだ。

言峰さんを殺さなければ、ウルクが守れないのだと――。

第二十一話 気づいたら悪役にされてた

泥の中から這い上がったら周りはラフムしかいなかった。

試しにと一匹ぶっ飛ばしたら畏れたのか、警戒するように後退しつつこちらへ近づいて観察して来ようとする。それを言峰は他人事のように眺めていた。

もしも何かする気ならば抵抗すればいい。

それよりもラフムがいること自体が問題だと思っていたのだ。

言峰にとつては、まだ何もしていない状況。

ただ麻婆を作っていただけの数か月。そこからキングウに呼び出され泥の中に入れられたような状況。

まだ何かを成し遂げていないだろうというかのように、消滅することが不可能になっていた。

やけに身体に魔力が漲っている。何故なのかは分からないが、ほのかに周りから良い匂いがするせいだろうか。

言峰が不意に、頭上に影が出来たことに気づき見上げた。

その先にあったのは——凜ではなく、イシユタルがぶちギレた様子で天高くからこちらを撃ち抜こうとする姿だった。

「アンタ私の財宝を奪って逃げたでしょう！ しかもそれを麻婆の材料なんかに使ってえ！ 絶対に許さないんだから!!」

「……ああ、そのことか」

「あとやけに堂々とした全裸姿どうにかしなさいよ！」

イシユタルに言われてようやく気がついた。

今の自分は何も羽織っていない。まるで第四次に泥の中から受肉し出てきたギルガメッシュのようではないかと。

己の身体に何か異変があったようには感じない。ただ魔力が異様

に漲るぐらいだろう。

イシユタルの攻撃を避けつつ、地面に落ちていた布を腰に纏う。まるで温泉に来た男性がタオルを巻くような状況だが、致し方がないだろう。みつともない身体をしているわけじゃないだろうしと、言峰は小さく溜息を吐いた。

「溜息を吐いてるだなんて、余裕そうですネー!! お姉さんちよつと本気になっちゃうかも!!」

「っ——!」

言峰は目を見開き、無意識ながらの反射能力でもってその攻撃を避けた。

そこにいたのはイシユタルではない。彼女と同じように怒った様子のケツアルコアトルだった。

「私とは初めましてになるのではないか？ 女神を怒らせた理由はないが……」

「ずいぶんとぶざけたことを言うのね!」

首を傾けつつ問いかけた内容はどうにも女神にとっての地雷だったらしい。

物理的にルチャリブレか何かをしようとしたのか、技を決められる前に彼女から距離を取ることに成功した。

「どうやらここはいったん撤退したほうがよさそうだと気づく。」

この場所に留まっても女神の攻撃が向かって来るだけ。それならばどういふ状況か理解するために一人になった方がマシというものだ。

「そう言峰は判断し行動に動く。」

「言峰さん!」

「……藤丸か」

「こ、とみね……さん……」

ボロボロと涙を流した様子の藤丸が、鳥か何かに捕まったままこちらを見下ろしてくる。

その表情は酷く虚ろだった。

今までの藤丸立香を知る言峰にとつては興味深い愉悦対象。しかしその表情の先にいるのは、何故か自分自身。

「もう止めてください。こんな……ウルクを滅ぼそうとするだなんて酷いこと……」

「ふむ？」

「私は、わたしはっ——あ、貴方を……言峰さんを、殺したくない！ やっぱり無理だよお！ だって、わたしは……言峰さんに救われたのに……貴方のおかげで今があるのに……！ 貴方が止まればそれでいいの！ それだけでいいの！ だから……わたしは……私……はっ……！」

愉悦できそうな状況だというのに、いったい何が起きているのだろう。

そう言峰は首を傾けただけだった。

そう、首を傾けただけだ。

だというのに、そんな行動すら藤丸の表情を絶望へと塗り替える。何故か周囲の殺気が濃くなってきたと感じたため、言峰は何も考えることなく撤退するほかなかった。

(惜しいな……)

そのため周囲にいて警戒しつつ様子を伺っていたラフムを巻き込むように、壁にしつつ逃げた。

走りながらも彼は悔しく思っていた。

何で泥の中にいたのだろうか。この状況を理解し、なおかつ自身自身のいる立場に別の人がいたならばきつと面白おかしく愉悦でき

たはずだというのに……。

自分自身を愉悦対象とするには——言峰に憑依した『彼』には、
まだ難しかった。

第二十二話 元凶を押し付けよう

言峰は女神たちの攻撃から逃走し、藤丸達から離脱した。

その後、麻婆まみれで倒れていた鬼娘によって何が起きたのかについて理解した。

どうにも自分が作り上げた麻婆が神秘の域に達してしまい、女神やら敵勢やらに多大な被害を与えてしまったらしい。その話を聞いただけで愉悦できたので満足した。

しかし一番問題なのは、それが自分自身のせいだと思われている件についてだ。

「ん？ なんだ、お主のせいではないのか？」

「私はただ麻婆を作っていただけだ。ウルクを麻婆の海に沈めようとしてやったわけではない」

「むっ……せめて麻婆ではなく菓子であったならよかったというに……」

「ウルクが菓子まみれならハロウインのような惨事になっていただろうな。いやそれも面白そうだが……」

「面白いとは何だ！ 美味しいの言い間違いだろう！」

「どちらでもいい」

話し終わった後、麻婆から逃げてやると森の中に入っていった鬼娘

——茨木童子と別れ、これから先どう動こうか考える。

なんせ現状自分がやらかした元凶だとカルデア勢力に勘違いされているからだ。

——いや、自分が動いた結果あなっただのだから、まあ元凶と言われたら否定しきれないなという思いはあるが。

どうせ元凶になるならもっと愉悦しやすい計画を立てて、藤丸立香達をより苦しめるようなやり方にしてやりたかった。それでもって、

敵側を裏切りカルデアの味方をして、まあいろいろと満足した後に見える予定だったのだ。

サーヴァントなのだからこのままみっともなく生き延びるつもりはない。

それは本物の言峰の思考に影響を受けてしまった『彼』が結論付けたこと。

カルデアは自分を裏切り者だと思っている。いや実際そういうものだ。麻婆を作っただけなのに裏切り確定と思われるのは少し癪だが……と、言峰は思考を回す。

「……そういえば、キングウは何処だ」

あのラフムの群れの中にキングウはいなかった。何処に行ったのかと思ったが、すぐに分かった。

茨木童子が逃げた方向とは真逆の森の奥から爆発音やら鎖が鳴るような音が響いているので、おそらくはあちらで戦っているのだろう。

キングウに近づき助けるべきか……見殺しにしてもいいが、ここでそれをやって面白いことなんてあるのかと言峰は考える。

すでに麻婆のせいで自分が知っている原作とはかけ離れた存在になっていそうな気がするから、キングウが倒れると大変な状況になる可能性もあった。

それにしても、やけに身体に力が漲るのはなぜだろうか……そう思いつつ歩いていたら時に出会ったのは、一匹のラフム。

「……………」

白いハンカチを手に付けたラフムが、こちらをじっと見つめる。

警戒しているのかそれとも何かを言いたいのだろうか。

言峰はその一匹だけで大人しいラフムが何かを探している様子に気づいた。

「……キングウを探しているのか」

「っ——」

「しかしその怪我では……」

なんとなくこれもまた原作乖離かと、言峰は考える。

自分がいるせいでこのラフムは傷ついた。おそらくはそのせいでこいつは消えるだろう。

そうした結果、キングウが消滅する未来があることを察した。

麻婆のせいで世界が滅びる可能性も視野に入れた。

それはそれで面白いが、結果としては楽しくない。

確かに武器（麻婆）の引き金を引いたのは自分だが、それを悪化させたのはおそらく元凶たるティアマトだろうからと、言峰は考えていたからだ。

ラフムは何も言わない。だが、その言いたいことは理解した。

ボロボロで消えそうな身体。同類のラフムにやられたのだろうか。所々真っ赤だが、少しいい匂いがするのは麻婆のせいかな。

「……助けたいか？」

ラフムは何も言わない。

しかしその空気は、自身が発した問いに対して、肯定を意味していた。

——ならばと言峰は考える。

自分がラスボス枠に入ってもいいが、それはなんだか単純すぎて面白くない愉悦になり得そうだと思っていた。

もつともつと、状況を面白おかしくしてやりたい。

「……いいだろう。お前の願い。その意志を受けとろう」

その白いハンカチを付けたラフムを背負い、言峰は森の中を駆け

た。

行く先は当然キングウがいる場所。

それは、元凶を押し付けて自分は味方で裏切つてないという計画が
始動した証でもあった。

第二十三話 タイミングが悪かった

何故こうなったのかと言えば、タイミングが悪かったとしか言いようがないのだろう。

「くそ……ちくしょう……なんで、なんで……」

新しいヒトなるものが生み出されははずだった。

しかし生まれてきたのは狂暴性の高い生き物。ウルクに住まう人と人を攻撃し合わせ、勝った方すら惨殺する。そんな無駄を好んでいるのは誰のせいかな。

その影響は、誰に受け継がれたのか。

「……ことみね……きれい……っ!!」

ああ、奴のせいだ。

だってそうだろう。アレがこのウルクに侵入し、奴と協力し新しいヒトと共に母の命に従え。言い方は悪いが、母のために今まで動いていた。

あの男はウルクにおいて使い物にならないと判断し、所詮は欠陥品。古い方の人間であればマーボーのような妙な食べ物を追いかけて続けるのも仕方ないと言えよう。

キングウにとっては、そんな欠陥品は必要なかった。

しかし無駄のないことをしたかったのだ。だから言峰をエネルギーとして使うことにした。

それが、この酷い結果を生み出したというのか。

言峰をエネルギーとして使い始めて一日でウルクに麻婆教なるものが誕生した。ウルクの女神たちに影響を与え始めた。

———そうして、ギルガメツシュ王が笑い死んだ。

意味が分からない。言峰は消えたというのに何故奴の影響が未だに残っているのか。

母が誤ったことをしたのか。

いや、母が目覚めたばかりだから——寝ぼけていたのか。

それとも、言峰が意図的にやらかしたのか。

「なんで……!」

ラフムと呼ばれた新しいヒトになるはずの生き物たちは皆無邪気に遊んでいる。

人を千切り、八つ裂きにし、楽しそうに弄んでいる。

そんな惨状だというのに、次第に増えていく泥は何故か——あれほどまでに苦しめられた麻婆の香りがした。

奴らは自分を裏切った。

母さんは、自分を捨てたんだ。

自分が言峰なんかをエネルギーとして使おうとするから、麻婆なんぞというものがウルクに溢れかえるようになった。そう認識していた。

「キヤハハハハハ!!」

「っ!」

聞こえてきた笑い声はラフムのもの。

麻婆を飲み干しているのか。それとも人間を引きちぎっているのか。

自分は裏切られた。

負傷を負い、このまま見つければきっと玩具として扱われるだろう。酷い死に方を、してしまうのだろうか……。

そう思っていたというのに——。

「ああ、その顔……そうか。貴様も私を敵と認識しているのか。……

「またしても私のせいか」

「っ——言峰ッ!!」

「そう狼狽えるな。お前に手土産を用意したぞ」

奴はキングウ自身を見つけ近づき、攻撃してきたラフムたちを追い払った。

そうして背中から降ろしたのは一匹のラフム。

ラフムから守ってくれたというのに、何故ラフムを手土産にされなきやならないのか。

言峰の思考回路がよくわからないキングウは、目が死にかけた。

「あっ……ああ……」

「えっ」

その声は、聞いたことのあるもの。

とても優しい女性だったはずの声がする。

「まにあった」

彼女の言葉に目を見開いたキングウは、言峰が微笑んでいた理由を知らない。

第二十四話 根本を抹消せよ

ラフムが溢れただけで終わったのなら、ここまで女神たちが怒るわけがない。

いや、ラフムがいるという惨状もなかなかのものだし、トラウマになるぐらいには嫌なものをみてきた。マシユが怒り、自分すら激情するぐらいには、あいつらがやったことは許し難いものだ。藤丸は認識していた。

ラフムを消せばいいのか。

それとも聖杯を奪っていったラフムがたどり着いた場所――

今もなおこちらへ向かって近づこうとしているティアマトを殺せばいいのか。

いや、全て違う。

そもそも現状ティアマトは一定の距離までは近づけるがそれ以上は無理なのだ。

だからラフムは男を探す。

ティアマトは悲しそうな音色を奏でるが、ケイオスタイドはウルクに溢れることはない。いや、今のところはといえるだろうか。

まるで、ケイオスタイドの川が流れている場所に麻婆と化したあの泥が、ダムのごとく怒濤に流れ川の流れを押し出すように。

一定の防波堤になっていたのだ。ケイオスタイドよりもただ一定に愛し、純粹に願った男の感情がティアマトの力に勝ったというのか。まさかの麻婆聖杯がウルクを救うというのか。

しかしそれも時間の問題。

ケイオスタイドと麻婆の泥が混ざり合い大変な状況になるかもしれない。

それに別の原因悪化となる可能性があった。

「このままじや特異点は解消されない。それどころかウルクの事象がそのまま正史になり、未来が狂う可能性が高い……分かるかい？ それはずまり、僕たちの敗北だ」

「うむ。それなる問題については我が命じよう！ まずはあの麻婆聖杯をどうにかして奪うことだ」

「ま、麻婆聖杯を？ 言峰さんから？」

ギルガメッシュ王の言葉に藤丸は呆然とする。

それは言峰さんを殺すことになるのではと藤丸は恐れているから。しかし王様は笑った。また笑死するかと思うぐらいには爆笑し、そうして言うのだ。

「麻婆なる辛さがウルクに浸透し、ラフムにすら影響を与えるものだ。その根幹を揺らがすことが出来れば弱体化はあり得るであろう……ただし、麻婆聖杯が力を失うことすなわちウルクへの攻めに転ずるものとする。——やるべきことは二つだ！ エレシユキガル、冥府の準備はどうだ！」

『まだかかるのだわ。……何故かは知らないけれど、麻婆の匂いがするガルラ霊が元氣いっぱいですべて予定よりすぐ終わりそうですけど……本当に理不尽なのだわ……』

鏡から聞こえてきた不満そうな声にギルガメッシュ王は嘔き出す。

「フハハハハ！ それが麻婆を願ったあの愚かな男に共鳴したガルラ霊の末路というものよ！ さて次だ。藤丸立香！」

「は、はい！」

「迅速に言峰を殺せ。麻婆の信仰心。その息の根を止めてやれ」

「ま、麻婆の息の根……？」

「あれらを流行らせたのは言峰だ。まあ我もあの泥を食い止めるのに使えるところ分かってからは早急に流行らせたが……」

言峰を殺す、という言葉に藤丸は視界が揺らぐ。

感情に何か重たいものがのしかかるのだ。きっとそれは王様からの重圧。言峰さんを殺さなきゃいけないという絶望。

でも、ここまで来たからにはやらなくてはならない。

それがカルデアの人類最後のマスターとしての責任感だと分かっていた。

だから藤丸は、まず決めたのだ。

「まずは麻婆をウルクから根絶する。ティアマトの前哨戦だよ、マシユ！」

「はい、先輩！」

元気よく頷いたマシユに藤丸は笑った。

そうして、隣にいる男を見た。

「……協力してくれるよね、天草」

「ええ、もちろんですとも」

「でも、先に言っておくけど麻婆聖杯はあげないよ？」

そんな声に、天草はただ微笑むだけだった。

第二十五話 言峰は麻婆聖杯を抹消した

「まにあった」

それは尊い犠牲となるべきヒトだった。

人にとつては悪しき泥。しかし何故か麻婆が特效薬みたいに人の中で駆け巡り、泥の影響を少なくしたせいだろうか。

言峰には分かったのだ。これは麻婆のおかげだと。

どうして麻婆なのかは知らない。

ただ本能的にケイオスタイドが純粋な水ならば、麻婆が粘り気のある不純物。つまりどっちも個性を持っていてどちらも人の中で主張し続けていたというだけのこと。

麻婆の力が何故ティアマトの泥に勝るのかについては——言峰自身がやらかしたのではなく、誰かのせいだろう……主にギルガメッシュ王とかがやったんだろうと、言峰自身はそう思っている。

「……なんで？」

血濡れで倒れていたキングウに、ラフムは近づいて来た。

「とても、きれいな——みどりのひと。あなたがたすかかってよかった」

「ありがとう。ありがとう」

これはきつと、原作の一場面だろう。

ただの純粋な願い。

助かってよかったという、綺麗な声。

それら全てにキングウは救われたのだろう。嬉しかったのだろう。

その人形は——緑の人と呼ばれた彼は、涙を一筋流した。それはとても綺麗な色だった。きつと藤丸が見たら感動するような場面のはずだ。言峰にとつては、それはあまりにもつまらない色だったが。このまま放置していれば消えそうな様子。それを言峰がただ黙って見ているわけではない。

「面倒だな……さて……」

無意識的に懐を探せば、何故か出てきた麻婆の香りがする聖杯。

「……………ふむ」

言峰は聖杯を手を持ったまま。

きつとこの衝動は本能——ラスプーチンとしての核。言峰綺礼そのものがやろうとしていることかもしれない。ラスプーチンの、言峰綺礼の身体に入っても魂は三つとも存在しているようなものだと、『彼』はちゃんと理解しているから。

キングウに泥の中へ蹴り入れられた後、消化されずにプカプカ揺れていた合間に知ることが出来たのだから。

言峰に憑依している『彼』としては、もう楽しければ何でもいいかとやらかすことにしたのだ。

「っ——！」

特に何かを考えるまでもなく。

——えいや、とその麻婆の香りがする聖杯をラフムにぶち込んだ。

それに悲鳴なき声を上げたのはラフムだった。

肉がちよつとだけ削られ、血が噴き出た。そうして埋め込まれた聖杯が徐々に形を変えていく。麻婆の香りはまだしている。

「んなっ!？」

キングウがびっくりしたような声を上げてきた。

その顔はギャグとかで見えるようなギョツとしたようなもの。「まさか彼女を麻婆に変える気か!？」と叫んでいたが、キングウが何を言っているのか言峰自身は分かっていないような態度を示した。

麻婆が死した肉を作り替える。

ケイオスタイドによって変異した細胞を、元に戻すかのように動く。麻婆の香りはゆっくりと、大地と草木のようなものになんか変わっているような気がした。いや、言峰達の鼻がもう狂っていて、麻婆にハーブの香りを足したようなカオスな匂いかもしれないが。

「どうせ感謝するならば、生きて態度で示してやれ」

「あっ……………うっ……………」

「その姿であれば、まだ生き続けられるだろう」

いや、言峰風に言うならば——この地獄をもっと長く生きて見せろとでも言い放つかのように。

しかしそれを理解しているのはきつと言峰自身以外だと第五次勢ぐらいだろうなと思いつつも、言峰は聖杯によって身体が変わり続けたラフム……………否、幼い姿をしたシドウリに目を向けた。

聖杯はちゃんと元の身体に戻せなかった。それはきつと、麻婆としての願いを使ったせいで魔力が枯渇したのか否か。それとも女神の泥に変質した細胞を完璧に治すには奇跡が足りなかったか。

もしかしたら聖杯か女神の泥——つまり女神の性癖でシドウリを少女にした可能性もあるが……………。

「貴方が……………なぜ……………?」

「やりたいことがあった。そのためには味方がいるだけだ」

言峰の声に反応したのはキングウだった。

「……僕も巻き込む気か？」

「むしろお前は何もやらないつもりか？」

「くっ……」

キングウが睨んでくるが、それは言峰の愉悦成分として吸収されただけ。無意味な抵抗でもあった。

状況を静かに眺めていたシドウリ……いや、シドウリリイ。略してシドウリリイは覚悟を決めて小さな口を開く。

「私にできることなら何でも、喜んでやります……」

喉がかすれたような声で、小さなシドウリリイがこちらを見上げる。

その目はぱっちりとしていて、可愛らしい容姿をしていた。

しかし聖杯は服を作らなかつたのかシドウリリイは裸だったので——キングウがとっさに自分の服を彼女にあげた。キングウは男型の姿をしていたらしく、言峰とキングウは揃って半裸の状態。そしてシドウリリイは肩をはだけさせた彼Tシャツみたいな状態だった。

きつとここにマシユがいたら叫ぶだろう。事案だと——。

第二十六話 底が見えない男

酷い男だと、キングウは考える。

奴がしてきたことは、全ての人や女神たちの願いを歪ませるものだった。

死にかけていたシドウリにすら、酷く歪んだ生を与えた。

それがどんなに酷い事なのか——シドウリにも分かっているのだろう。しかし彼女はウルクのためにと自らの歪まされた命を投げ出す覚悟を決めた。

だから、キングウは何も言えなかった。

この男に対して攻撃的にもなれなかった。

シドウリが『そういう運命』であると受け入れているのなら、キングウに止める権利はない。

たとえその先どんな酷い目に遭おうとも、キングウは止めることができない。だからそれは、ギルガメッシュに期待するしかないのだ。

何故この男に聖杯なんかを分け与えてしまったのか。

そうキングウは齒ぎしりをする。

麻婆聖杯とは名ばかりの、純粹すぎる願い。

たかが麻婆と考えるはいけない。

聖杯に満ちていた麻婆なのだから。

麻婆によって歪まされたのは、このウルク全土だけではないのだから。

「……いったい何がしたいんだ」

「ふむ。まずは現状をひっくり返そうと思っているが」

「現状を？」

「ギルガメッシュに味方すると決めているのでな。このままウルクを

テイアマト神に好きなようにさせたくないだけだ」

それは嘘だとキングウはとっさに思ってしまった。

どうせ最後にはギルガメッシュを裏切るつもりだろう。

それと、ウルクを好きなように蹂躪しまくっていたのは誰だったのかと、キングウは思わずというように言峰の方を見た。

この男、麻婆でどれだけの被害を出したのか本当に分かっていないのかと。

それにシドウリは何も言わない。

ただキングウと言峰の会話を聞いているだけである。

キングウはシドウリをチラリと見て、そうしてまた言峰の方を見た。

周りにいるラフムたちは倒されていた。その道中服を発見しようやく着こむことに成功したが、それでも上半身は裸だった。ウルク国民がそういう服装なのだから仕方がないとキングウは諦めた。

「ラフムを解放するには聖杯の力が必要だ」

「……はい。承りました」

そうして言峰は、幼い姿をしたシドウリを見た。

キングウは理解する。奴が何を言っているのかを。

彼女の命は言峰によって救われた。

聖杯の力によって、彼女は麻婆聖杯と一体化したようなもの。疑似的に人でなくなった状態だ。

聖杯の魔力はまだ残っている。

麻婆聖杯というには『麻婆』の香りも何もかもぶっ飛んでいてまさしく『シドウリ聖杯』として新しく生まれ変わったようなものだろうけれど……。

「救った命は……彼女の命は、このために使う気か……言峰ッ！」

そのせいで麻婆が溢れた川は、その泥はティアマトのケイオスタイドに飲み込まれつつある。まだ聖杯の力は失われていないので防波堤の役割をきちんとしているが……。

ティアマトは女神だ。それも原初の神である。

そんな母さんがラフムに指示して、キングウ自身の持っていた麻婆とは全く関係ない聖杯を奪い力をため続けている。

まだ大丈夫だろうけれど、ウルクに来るのも時間の問題——ならば、それを止めるのがシドウリの役割だろうと。

そう思ったキングウは言峰を怒鳴りつけたのに、男は首を小さく傾けた。

「何を言っている。私はただひっくり返したいだけと言っただろう」

「……はっ？」

「お前の命はここで消すつもりはない。それをすればギルガメッシュが許さないだろうからな。……さて、ティアマト神とやらに麻婆の美味さを教え込む時間だぞ」

「はあっ？」

——キングウはシドウリのためにその命を使う気があった。自分を救おうとしてくれた彼女に対して、恩を仇で返すつもりはなかった。

そして、その身体に残るエルキドゥとしての感情が、ウルクを裏切ることが難しくなった。

だからキングウは言峰を信用しない。彼がシドウリに対して酷いことをして、それを彼女が抵抗するなら言峰と敵対する気があった。

言峰が何をしようとしているのか、キングウには分からない。分かりたくもない。

ただウルクに対してティアマト神より酷いことをするのだろうか
と戦慄しただけだ。

ティアマト神の事を完全に切り捨てるには、少しだけ遅かったようだ。同情なんてする立場じゃないけれど、とキングウは思う。

(母さん……僕はともかく、味方につける人を間違えたみたいだよ……)

キングウはこの先で起き得るであろう惨状に、死んだ目になった。

第二十七話 ティアマト戦まであと三日

藤丸は麻婆聖杯をどう攻略するのかについて考えていた。

なんせこのウルクはもはや麻婆に侵略されているようなもの。しかもその麻婆は本来ウルクに存在してはいけない禁忌なるものだと、藤丸は理解している。いや、ロマニやマシユからはもうちよつと詳しい説明をされていたけれど、とりあえず分かりやすく言えば『この時代に存在してはならないレシピ』ということだけは理解できた。つまり禁忌である。

ギルガメツシュ王はあえてそれを広めた。

何故ウルクが自滅する方へ導いたのかと言えば、ある意味ラフムを止めるための防波堤を作るため。麻婆教とはつまり、麻婆の泥で溢れてしまったウルクに対しティアマトが攻めてくるからそれを阻止するようあらかじめウルクの民全員に広めていたということだった。だから天草は利用されたとのこと。「麻婆聖杯は別にいらん。それを欲するというのなら好きにするが良い！」とギルガメツシュ王が言っていたからとりあえず命じられるがままに麻婆を売っていただけ——ということである。

だからきつと、天草は麻婆聖杯を狙うだろう。

その時に彼と敵対するかもしれない。しかしそれはティアマト戦が終わってからだと思う。……いや、そう思いたいと藤丸は願っていた。

とりあえずウイルスバスターのごとく扱われた麻婆は今やウイルスそのものとなっている。

ならばそれをどうにかするため、まずは麻婆の勢いを止めよう。そう考えて藤丸は動くことにしたのだ。

「麻婆ラフムが誕生してるなら、麻婆じゃなくすればいいんだ！ つまり辛党を甘党へ惹き込むんだよ、マシユ！」

「な、なるほど……それでシドウリさんから教わっていたあのバターケーキを……」

「……うん。シドウリさんが亡くなって……その無念を晴らすためにも……私たちは前を向いて歩かなきゃいけない。シドウリさんが頑張ってきたことを全部無下にしちやいけないもん!!」

「はいー」

バターケーキを作り上げてはそれをラフムにぶち込む。

ほんのりとした麻婆の香りがするラフムはそれだけで動けなくなったのだ。何せ極限な辛さの固まりな身体に甘味をぶちまければそれだけで悶絶もの……であると思っっているから。

藤丸はもはや自分が何を言っているのか分かっていなかった。

ただ「麻婆に対抗するならお菓子を食べさせればいいと思うよー」という、マーリンが身体を震えさせながら言ったアドバイスに従って動いているだけだから。

——余談だが、話をした直後フォウがマーリンに向かって強烈な飛び蹴りを行っていた。そのせいでマーリンは腹痛を起こしてしまっただけだ。

というわけで、藤丸は考えたのだ。

マーリンの言う通り麻婆聖杯を攻略するためにお菓子をというのなら、ウルク産のものを。シドウリさんが亡くなってしまったと理解したあの日から、藤丸は忘れたことのないバターケーキをラフムたちの口にパイ投げのごとくぶち込むと決めていた。

天草はちよつと遠い目で指示通りに行っている。

ケツアルコアトルは楽しそうにプロレス技を決めながらもラフムたちの口にケーキを投入している。

「……麻婆の勢いは弱まってきたと思う」

「はい、きつと言峰さんは麻婆ラフムがいなくなればすぐ出てくるはずです……」

「うん、その時が勝負だよ。麻婆聖杯を奪って……言峰さんを……こ

とみね、さんを……」

「先輩……」

「……大丈夫。私はやれるよ……うん！」

藤丸は前を向いた。

シドウリさんが犠牲になったのだから、覚悟を決めないといけない。

アナがいなくなってしまったのだから、やらなきゃいけない。

そう思っていたのに……。

「ああ、心が解放されたかのようだ。麻婆が消えていったからか……

甘味は好きだ。もつと寄越せ！」

「う、牛若丸……!?!」

ティアマトの泥たるケイオスタイドに飲み込まれていた牛若丸。麻婆聖杯によつて出来た防波堤みたいな泥とは違う勢力が、襲い掛かってきたのだ。

第二十八話 もう戻れないので

「牛若丸！　なんで!?!」

「先輩、落ち着いてください。このままだと牛若丸さんが……!」

「っ————マシユ、戦闘準備！　甘味が欲しいって言うならばち込んで!!」

「はい!」

パイ投げのごとく両手にバターケーキを持ったマシユが、片方を牛若丸にぶん投げた。下手すればエミヤオカンが「食べ物を粗末にするな!」と説教する場面だったが、牛若丸はよほど甘味を求めていたのか剛速球で飛んでくるバターケーキを顔面で受け止め食した。

ウルク不在のアルトリアもびっくりするだろうと思えるほどの速度で食べ終えたのだ。

「それだけか！　もつと寄越せ!」

マシユはそのまま片手に盾を構え、もう片手にバターケーキを持ちじりじりと相手の反応を伺う。

「牛若丸さん、勢いは衰えず……いえっ！　勢いは増していますが殺意は消えつつあるようです!」

『こちらでも魔力計測は行っている!　牛若丸の魔力値が下がっている!　このままいけば消滅できるかもしれない!』

「追加情報ありがとうドクター!　つまり牛若丸が満足すればあのどす黒い麻婆みたいな顔をしている牛若丸が真っ白のふわふわケーキみたいな牛若丸に戻るってことだよね!　よしやるよ……っつて、イシユタルたちは!?　マリーンは……ティアマトが目覚めたあとアドバイスだけして意地でも消えないようにしてたみたいだけど、いつの

間にか消滅してたよね……」

『ティアマトの方へ向かったのは確認できてる。たぶん聖杯をどうにかしようとしているんだろう。大丈夫だ、このまま牛若丸をどうにかした方がいい!』

「よし、ドクターが言うならしよやうがない。出番だよ天草。牛若丸を満足させて!」

「ええ———お腹空かせたまえ!」

「天草さんそれはスキル詠唱なんですか!？」

「黙秘する!」

一見すればカオスすぎる状況。

でも、藤丸達にとつては真剣だった。

マイナスをプラスにするにはどうすればいいのか。そう考えて思い至った内容。

マーリンが真剣に言っているわけじゃないのは理解していたけれど、藤丸はそれでもよかった。それでどうにかなれる可能性があるなら、ぶっ飛んでいても良かった。それで助かった経験は何度かあるぐらいただし、ケツアルコアトルとの戦いでも麻婆は絡んだけれどプロレスしてた記憶しかないし。

マイナスにはマイナスを。

辛さには甘さを。

逆転の発想を———。

「お願い戻って牛若丸! 甘いものならたっぷり食べさせてあげるから!」

藤丸の声にどこか遠くから「なぬっ!? ならば吾はそちらに———
———くっ、何をやる言峰貴様あ!」という悲鳴と怒号が入り混じったような少女の声が聞こえたような気がしたが、気のせいだと藤丸は考え、牛若丸の方を見た。言峰さんがここに居るわけがないのだからと、

自分の無意識的な感情に振り回されないよう覚悟を入れ直しつつ。

パイ投げのごとく攻撃を加えていくと、ゆつくりと表情が白く――

――元の牛若丸に戻っていくような気がした。

ただそれはつかの間の安堵。

「あぁっ!？」

牛若丸が一定の白さまで戻ると、そのまま身体を維持できなくなったのか消滅してしまったのだ。

しかし周りにある泥は、消滅を受け付けない。

「えっ」

「牛若丸さんが……ぞ、増殖しました!？」

『なんだって!？』

「いえ、待ってください。ど、同士討ちです！ 牛若丸さんが……色違

いのラフムに攻撃しています！」

『ちよつと待ってくれもう一回言ってくれないか!? 色違いが何だつて!？』

そう、そこにあつたのはカオスな空間。

麻婆の匂いが微かにする泥から出てくるのはほのかに赤いラフムと牛若丸。麻婆の香りがするそれらは、色違いで無臭のラフムたちを攻撃し、蹂躪する。

そうしてこちらをチラリと見たかと思えば、「甘味を食わせろ!」「3 j e k 9 b p!」「辛いのもうこりこりだ!」「3 j e k 9 b p!」とそれぞれが叫びながらもこちらに向かって襲い掛かってきた。

マシユと天草が対応し、麻婆ラフムには物理的な攻撃を加えつつ口にケーキを投げ入れ、牛若丸も消滅するほど満足できるまで食べさせた。

「先輩……このままだとカルデアから派遣されていた臨時キッチン組たるエミヤ先輩たちが作ってくれたバターケーキが無くなってしまいます！」

「ぐう……無限に食べるがごとし……アルトリアみたいな腹ペコを想定して作るんだった……!!」

「先輩!」

「しようがないか……撤退するよ撤退! 天草、しんがりは任せた!」
「了解しました」

……

「……はあ、はあ……ここまでくれば、安心かな?」

逃げた先はウルクの中央部。

ギルガメツシュ王がいる王宮の中。そこにあつたのはいつもの騒がしさではない。

薄暗い王宮にウルクの人々が集まり、それぞれが避難してきたのか床に座ったり立ったりたまま呆然と空を見上げたりしている。

「王宮は静まり返ってますね……ギルガメツシュ王の指示により無事でしたウルクの人々が集結していて……でもみんな、暗い顔をしています……」

『いやそりゃあね? 麻婆とバターケーキの戦争に襲われたようなものだし、どうしてこうなったって思うのは当然というか……』

「ドクター! 我々はバターケーキ勢力として戦争を仕掛けたつもりはございません! 先輩と共に麻婆を打破するための決死隊なんですよー!」

『似たようなもんじゃないかい!?』

ドクターとマシユの漫才染みた会話に藤丸は苦笑する。そうして、この先どうすればいいのか悩んだ。

そんな時だった、ダ・ヴィンチちゃんが考えるように何かを言うの

は――。

『うーん……思ったんだけどさあ、ラフムにも勢力があるんじゃないかい?』

「勢力?」

『赤色のラフムがいただろう。その赤色……つまり麻婆ラフムたちはその名の通り麻婆に浸食されたラフム勢力。でもって彼らが襲っていたのは無臭の黒色の姿をしたラフムだった……つまり、ラフムには二種類存在していて、彼らはそれぞれ敵対しているんじゃないかな?』

あつ、もちろん肌が黒かったけどほのかに赤色でもあった牛若丸も同じだと思うよ。麻婆ラフムとね。通称、麻婆牛若丸だ!』

「……つまり?」

『麻婆ラフムと麻婆牛若丸。そして無臭のラフムとで争ってもらって勝利した方が我々の敵になるって戦略はどうだい?』

「それはそれで問題がありそうですダ・ヴィンチちゃん!!」

「マシユの言う通りだよ。……つまりそれってさ、ラフムと牛若丸だけど……聖杯戦争やってるようなもんだよね? サーヴァントではないけれど、聖杯によって作られたようなもの……いや、元はティアマトとか言ってたけど似たようなもんでしょ」

藤丸は考えながらも言う。

ただの想像。このまま無視しても大丈夫かもしれない。ダ・ヴィンチちゃんの言う通りどちらかが戦って勝った方が自分たちの敵になるかもしれない。

でも、と。藤丸は天草を見た。

彼は藤丸と目が合うとにっこりと微笑んでくるだけ。それは何となく言峰を思わせた。彼と天草は全く違う存在だけれど……それでもと。

「それで勢力が二つに分かれていてそれぞれが争ってるならどちらも勝たせない方がいいような気がして……ううん、多分言峰さんの事を

思うなら、時間の問題だと思う」

『なるほど、立香ちゃんはそう断言できるわけだ……根拠はあるのかい?』

「ないよ。ただの勘……言峰さんをこのまま放っておいたら大変なことになるっていう、女の勘だよ」

『なるほどそれは否定しきれないなあー!』

そうしてダ・ヴィンチちゃんは笑った。

馬鹿にしたようなものじゃない。爽やかに笑って『分かったよ、立香ちゃんの好きにしたらいい。私達が責任を持って君たちをサポートしよう!』と言ってくれた。

「ティアマトを倒すために、まずは厄介な言峰さんから……言峰さんが持つ麻婆聖杯をどうにかしよう。あのままだとウルクが滅茶苦茶になるから……麻婆聖杯をぶっ壊す。それでいいね、マシユ?」

「はい、もちろんです!」

「おや、僕には聞かないんですね」

「天草はどうせあれでしょ。どさくさに紛れて麻婆聖杯持っていこうとか思ってるんでしょ。麻婆聖杯が無害になるなら考えるけど。でも駄目なら……」

天草が敵になるかもしれないけれど、藤丸は考えながらも言峰さんの事を思った。

早く終わらせて、彼の作った甘いココアが飲みたいな。

でもきつと、それはもう無理なんだろうけれど……。